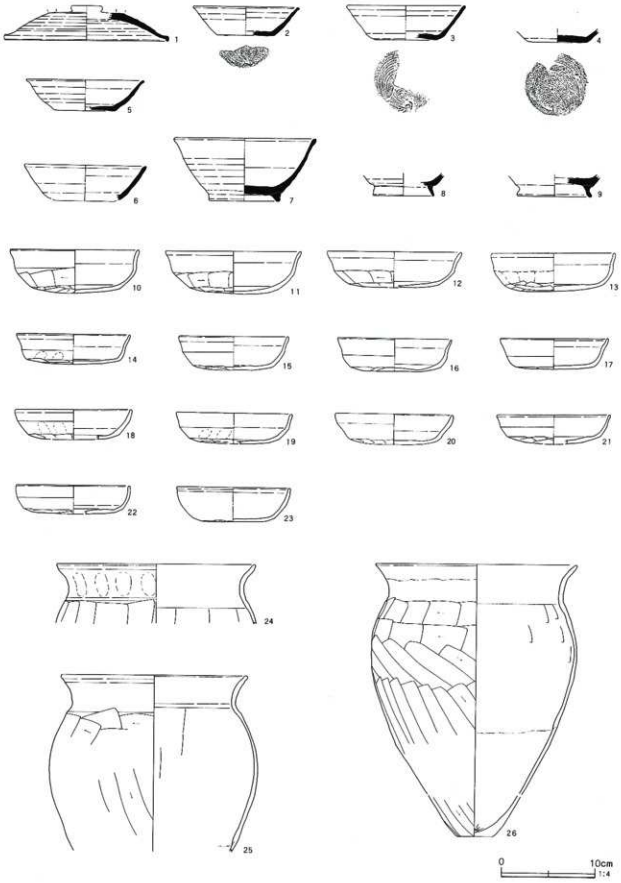
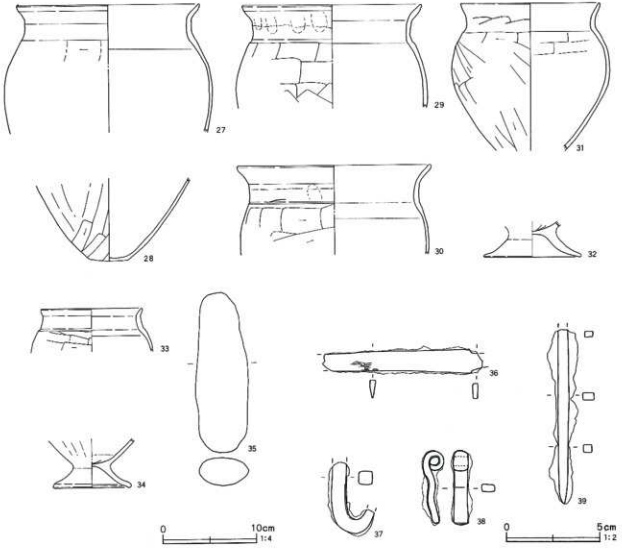
第36図　第14号住居跡出土遺物(1)



位置し南壁に接している。139×67cmの長楕円形で、深さは31cmである。壁溝はカマドと貯蔵穴付近を除いてほぼ全周し、幅20～38cm、深さ8～14cmである。ピットは3本検出されたが何れも主柱穴とは考えられない。P1はカマドと貯蔵穴の間にあり、覆土に焼土、炭化物が含まれていた。P1からP3の深さは、9cm、13cm、12cmである。掘り形は床面全体を浅く掘り下げ、周辺部のみ深めに掘る傾向が見られる。

遺物は、カマドと貯蔵穴の南壁際に集中して出土している。出土遺物は多いが、接合率は良くない。須恵器は全体の1割程度で、大半が土師器である。須恵器は蓋、坏、高台付坏等が、土師器には坏、甕、台付甕等が認められ、他に鉄製品、編み物石が出土している。また、図示しなかったが貝巣穴痕泥岩が17点出土している。

第37図　第14号住居跡出土遺物(2)



第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋	(17.4)	2.9		ABF	A	灰	40	覆土	末野産
2	坏	(11.0)	3.0	(6.1)	AFG	B	灰	20	覆土	産地不明
3	坏	(12.4)	3.6	(6.5)	AF	B	にぶい橙	45	覆土	土師質　産地不明
4	坏		2.0	(6.4)	AF	B	灰	70	覆土	末野産
5	坏	(12.2)	3.3	(6.6)	ABF	A	灰	40	覆土	産地不明
6	坏	(12.8)			AF	B	にぶい橙	25	覆土	土師質　産地不明
7	高台坏	15.0	6.6	7.5	ABFG	C	灰白	70	床直	末野産　内外面磨耗著しい
8	高台坏		2.4	(6.4)	AB	A	灰白	20	覆土	産地不明
9	高台坏		2.9	(7.8)	ABB'CF	B	にぶい黄橙	20	撹り形	末野産　土師質　磨耗著しい
10	坏	13.5	4.6	9.4	AB'F	C	にぶい橙	85	南壁際	
11	坏	14.4	4.5	9.5	AB'	B	橙	65	南壁際	内外面やや磨耗　歪み有り
12	坏	(14.2)	3.8	9.2	AB'G	B	にぶい橙	30	覆土	
13	坏	13.0	4.0	10.6	AB'G	B	橙	55	覆土	
14	坏	(12.0)	3.2	10.0	AB'	A	にぶい橙	55	覆土	
15	坏	11.6	3.6	8.7	ABB'G	B	にぶい橙	70	南壁際	内外面磨耗　口縁歪み有り
16	坏	12.0	3.4	9.4	AB'G	B	明赤褐	95	覆土	
17	坏	(11.4)	3.3	(8.4)	AB'G	B	にぶい橙	40	覆土	内外面磨耗
18	坏	(12.3)	3.1	(9.2)	ABB'	B	灰褐	40	覆土	
19	坏	(12.3)	3.3	(9.6)	AB'G	C	にぶい橙	65	南壁際	内外面磨耗著しい
20	坏	(12.4)	3.3	(9.4)	ABB'G	B	にぶい橙	55	覆土	内外面磨耗
21	坏	(12.0)	3.1	(9.9)	AB'G	B	にぶい赤褐	40	南壁際	表面やや磨耗
22	坏	(12.0)	3.0	(10.5)	AB'G	A	にぶい橙	40	覆土	内外面磨耗
23	坏	(12.0)	4.6	(6.7)	AB'CG	B	にぶい赤褐	45	覆土	
24	甕	(21.0)	6.3		AB'C	C	明赤褐	30	覆土	
25	甕	19.5	18.8		AB'	B	明赤褐	60	覆土	
26	甕	21.3	(29.0)	3.9	AB'F	B	明赤褐	85	覆土	内外面やや磨耗
27	甕	(19.3)	13.7		AB'G	B	橙	40	床直	内外面磨耗著しい
28	甕		8.7	4.0	ABC	C	にぶい橙	85	カマド	内外磨耗著しい
29	甕	(19.0)	11.0		AB'C	A	橙	45	カマド	内外面やや磨耗
30	甕	(20.4)	9.5		AB'C	B	橙	20	カマド	内面磨耗著しい
31	台付甕	(14.6)	15.7		AB'G	B	にぶい赤褐	40	南壁際	
32	台付甕		3.8	10.1	AB'	B	明赤褐	70	南壁際	
33	甕	(10.8)	4.6		AB'	B	明赤褐	35	南壁際	ＳＪ２-29と同一個体か
34	台付甕		5.2	(8.0)	AB'	B	にぶい赤褐	45	床直	ＳＪ２-26と同一個体か
35	編物石	重さ433.62g　南壁際								
36	刀子	現長8.5cm、刃幅最大1.2cm、背幅0.3cm、重さ12.43g　覆土　切先・茎大半欠								
37	鉄製品	現長3.8cm、断面幅0.7×0.7cm、重さ9.49g　覆土　角棒状の破片　折れ曲がる部品　両側欠								
38	鉄製品	現長3.9cm、断面幅0.7×0.4cm、重さ5.86g　覆土　先端環状の棒状の破片								
39	釘？	現長9.3cm、中央断面幅0.6×0.4cm、重さ14.12g　覆土　片側欠								

第15号住居跡（第38・39図）

Ｖ－47グリッドを中心に位置する。第45・46号溝跡に南北に切られ、北東コーナー付近を第278号土壙に壊される。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸5.45m、短軸4.10m、深さは0.27～0.34mである。主軸方位はＮ－90°－Ｅを指す。

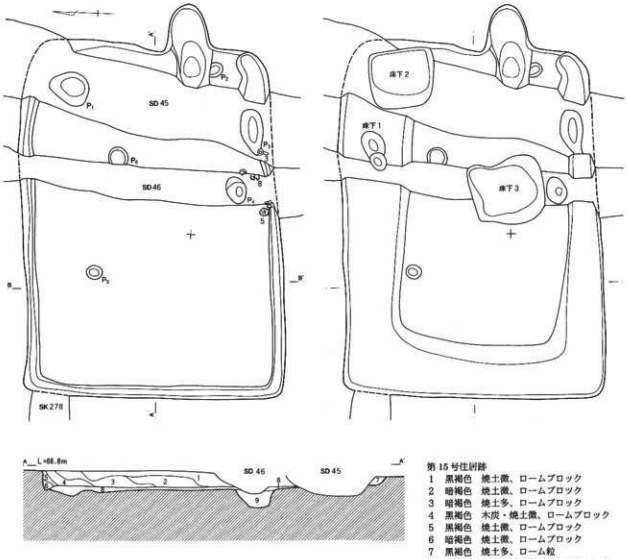
床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は全体的に焼土粒子、ロームブロックを含んでいる。

カマドは２基検出された。カマドＡは東壁中央よりやや南寄りに設置され、前面を第45号溝跡が壊されている。煙道は壁外に延び、袖は確認できなかった。燃焼部は床面を15cm程度掘り下げているが、明瞭な火床面は確認できなかった。カマドＢは南東コーナーに位置し、覆土中に焼土、炭化物、灰を多く含む層が見られ、火床面と考えられる焼土が確認されたためカマドと判断した。しかし、第45号溝跡に大半を壊されているため詳細は不明であるが、カマドＡより先行するものと考えられる。壁溝は東壁を除いて全周する

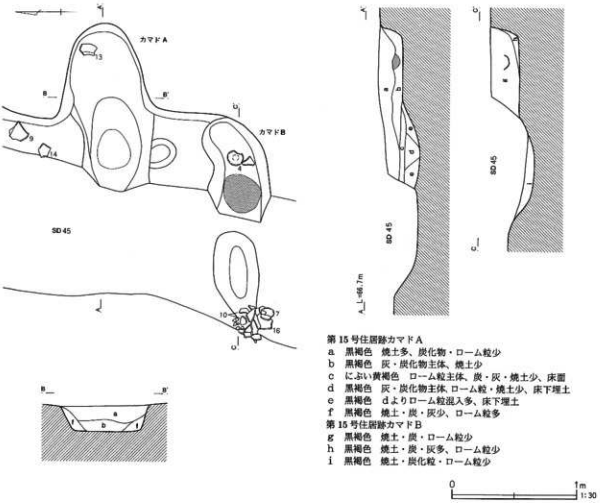
と考えられ、幅15～21cm、深さ３～10cmである。ピットは６本検出された。Ｐ１は第45号溝跡の底面に検出されており、位置的に貯蔵穴の残欠とも考えられる。住居跡の床面からの深さは27cmである。Ｐ３はカマドＢの前面に位置し、Ｐ１と同様に第45号溝跡の底面で検出された。覆土に焼土粒子や炭化粒子を含んでおり、カマドＢの覆土と類似しており、カマド前面の掘り窪めた部分とも考えられる。床面からの深さは19cmである。他のピットの深さはＰ２＝４cm、Ｐ４＝床面から45cm、Ｐ５＝７cm、Ｐ６＝52cmである。掘り形は床面全体を掘り下げ、周囲を溝状に深くしている。床下に土坑が３基検出された。

造物はカマドと南壁際に多く見られた。出土量は多いが、接合率は良くない。全体量での須恵器と土師器の割合は１：７程度である。須恵器には蓋、坏、高台付坏が、土師器には坏、甕等が認められる。他には鉄製品が３点、貝巣穴底泥岩が７点出土している。

第38図　第15号住居跡(1)



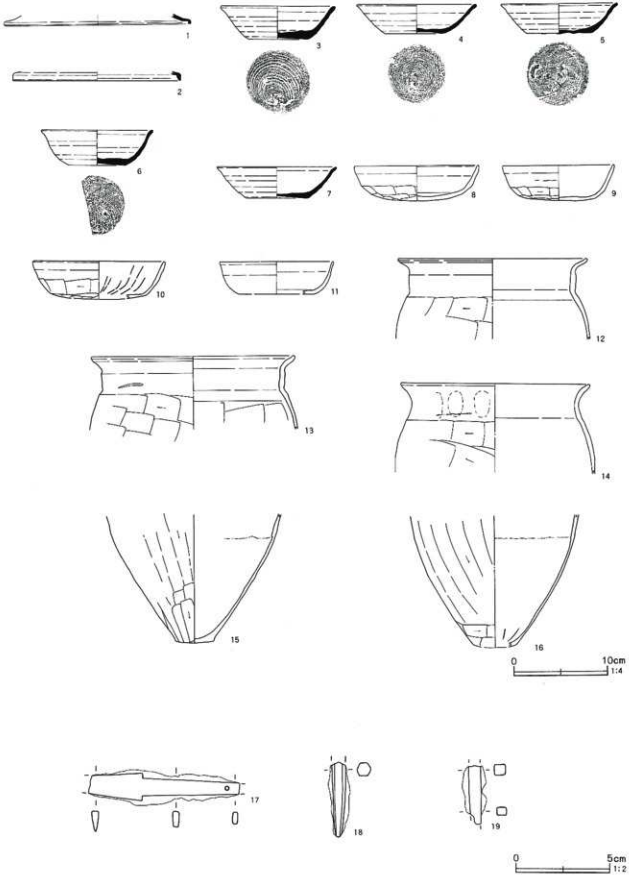
第39図　第15号住居跡(2)



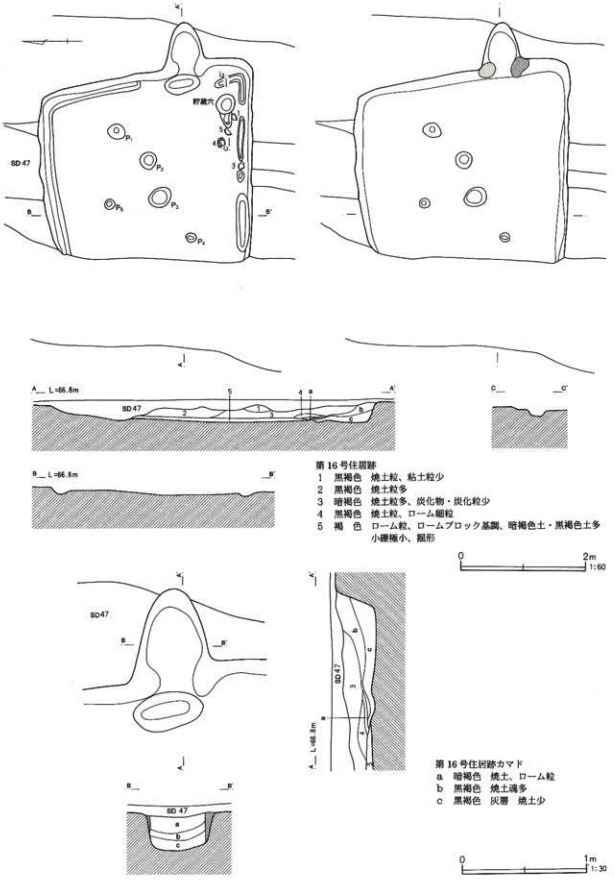
第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋	(19.7)	1.1		ABCF	C	にぶい橙	10	カマド	末野産　表面磨耗著しい
2	蓋	(17.8)	1.0		ABG	B	灰	10	覆土	末野産　表面磨耗著しい
3	坏	11.9	3.5	6.6	AF	B	灰	90	P3	末野産
4	坏	12.5	3.1	6.4	AEF	B	黄灰	90	カマドB	末野産
5	坏	12.2	3.2	6.7	AF	B	灰	85	南壁際	末野産
6	坏	(11.8)	3.2	(6.2)	AD	B	灰	25	覆土	南比企産　底部窯印「×」
7	坏	(12.6)	3.3	6.6	ABFG	B	黄灰	55	P3周辺	末野産　表面磨耗著しい
8	坏	(13.2)	3.7	(9.7)	AB'CFG	B	にぶい橙	30	掘り形	内外面磨耗著しい
9	坏	11.8	3.7	8.3	ABB'	C	橙	65	床直	表面磨耗著しい　口縁に粘土紐接合痕
10	坏	(14.0)	3.9	(10.4)	ABG	C	にぶい橙	35	P3周辺	表面磨耗著しい　放射状暗紋不明瞭
11	坏	(12.0)	3.4	(8.2)	ABCG	A	にぶい橙	15	覆土	内外面磨耗著しい
12	甕	(20.0)	8.6		AB'C	B	橙	20	覆土	内外面やや磨耗
13	甕	(21.4)	7.8		AB'C	A	橙	20	カマドA	
14	甕	(20.0)	9.4		ABB'C	B	橙	10	床直	内外面やや磨耗
15	甕		13.6	4.0	AB'C	B	にぶい橙	60	床下3	内外面磨耗著しい
16	甕		14.0	(4.6)	AB'C	B	橙	40	P3周辺	内外面やや磨耗
17	刀子	現長8.1cm、背幅0.4cm、刃幅最大1.5cm、重さ19.3g　覆土　刀部一部・茎尻欠								
18	鉄製品	現長4.0cm、断面幅0.7×0.7cm、重さ5.43g　覆土　棒状の先端部破片　断面六角形								
19	鉄製品	現長3.1cm、断面幅0.5～0.6cm、重さ5.14g　覆土　角棒状の破片　両側欠								

第40図　第15号住居跡出土遺物



第41図　第16号住居跡



第 16 号住居跡

1　黒褐色　焼土粒、粘土粒少
2　黒褐色　焼土粒多
3　暗褐色　焼土粒多、炭化物・炭化粒少
4　黒褐色　焼土粒、ローム細粒
5　褐　色　ローム粒、ロームブロック基調、暗褐色土・黒褐色土多
　　小礫極小、細形

第 16 号住居跡カマド

a　暗褐色　焼土、ローム粒
b　黒褐色　焼土塊多
c　黒褐色　灰層　焼土少

第16号住居跡（第41図）

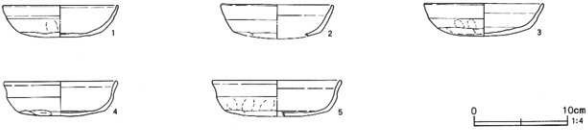
V－48グリッドを中心に位置する。住居跡全体を第47号溝跡に切られ、西壁は検出できなかった。平面形態はやや歪んだ方形になると思われ、南北3.41m、東西の残長3.18m、深さは0.27～0.29mである。主軸方位はN－90°－Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は概ね3層に分かれるが、焼土粒子を含んでいる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。煙道部は壁外に延び、ロームを主体に構築された小さめの袖を持つ。覆土最下層に明瞭な灰層が残存しており、前面の横長の落ち込みに続いていた。貯蔵穴は南東コーナーに位置している。53×32cmで、円形と楕円形のピットを重ねたようになっており、深さは8cmと浅い。形態、深さ共に貧弱で、貯蔵穴としたが疑問が残る。壁溝はカマド周辺以外で断続的に検出された。幅9～27cm、深さ3～11cmである。ピットは5本検出されたが柱穴であるかは判断できなかった。P1～P5の深さは、11cm、4cm、9cm、7cm、5cmである。掘り形は床面全体を掘り下げていた。

出土遺物は多くなく接合率は悪い。須恵器片の中には、回転糸切り痕を残す坏底部片が2点認められたが、極めて小片で図示できなかった。土師器は、坏、甕が認められるが、甕は極小片となっていた。

第42図　第16号住居跡出土遺物



第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.2)	3.4	(8.8)	ABG	B	にぶい橙	25	貯穴周辺	内外面磨耗著しい
2	坏	(11.7)	3.3	9.2	ABG	B	にぶい橙	25	覆土	内外面磨耗著しい
3	坏	12.5	3.4	9.7	ACG	B	にぶい橙	80	床直	内外面磨耗著しい
4	坏	12.0	3.7	9.2	AB'	C	にぶい赤褐	80	床直	内外面磨耗著しい
5	坏	(13.5)	3.8	(11.1)	ABG	B	にぶい橙	50	貯穴周辺	内外面磨耗著しい

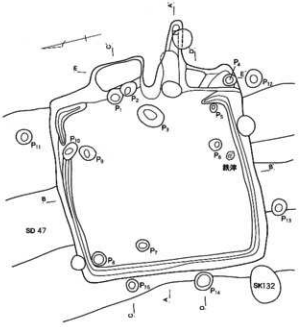
第17号住居跡（第43図）

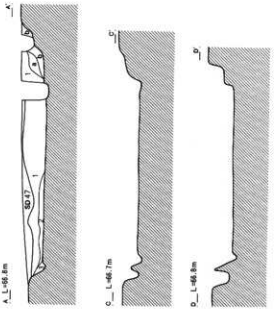
U－49グリッドを中心に位置する。カマド付近を除く住居跡全体を、第47号溝跡に切られているが、本住居の方が深いため床面の検出は可能であった。また、カマドや、北壁と南壁の一部を小ピットによって壊されている。平面形態はやや歪んだ方形で、規模は長軸3.42m、短軸3.10m、深さは0.26～0.41mである。主軸方位はS－82°－Eを指す。

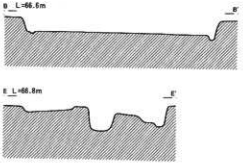
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は3層に分かれるが、ロームを含んでいる。

カマドは東壁中央よりやや南に設置され、煙道部と燃焼部を小ピットに壊されている。燃焼部の掘り込みは見られず、煙道部には段がつけられている。カマド左袖の傍には棚状の施設が壁外に向かって設置されていた。カマド右側は同様の施設があったとも考えられるが、袖が明瞭でなく棚状の部分に段を持つ。貯蔵穴は確認できなかった。壁溝は東壁を除いて全周する。幅16～25cm、深さ3～12cmである。ピットは住居跡内に10本、住居跡外に5本検出された。住居跡内のものは何れが柱穴であるか判断できなかった。P1～P10までの深さは、6cm、7cm、16cm、11cm、8cm、9cm、14cm、11cm、15cm、15cmである。住居跡外には、

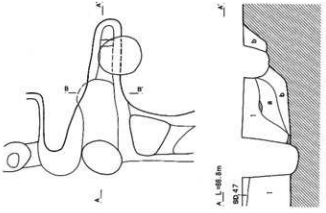
第43図　第17号住居跡・出土遺物

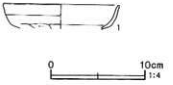






第 17 号住居跡
1　黒褐色　ロームブロック多、粗砂少
2　黒褐色　ローム粒少
3　黒褐色　ローム粒、焼土





第 17 号住居跡カマド
a　黒褐色　ロームブロック、焼土
b　黒褐色　焼土ブロック多

北壁側に1本、南壁側に2本、西壁側に2本検出されているが、住居跡との関係が明確に掴めなかった。南壁と西壁のものはそれぞれ対となっているようにも考えられる。P11～P15までの深さは、39cm、34cm、19cm、25cm、16cmである。

遺物は極めて少なく、総数で50片に満たない。出土土器は全て土師器で、図示した坏以外は3cm以下の小片である。破片には甕の口縁部が3片認められる。また、南壁近くから椀型滓が出土している。

第17号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.1)	2.6		ABB'G	B	にぶい橙	15	カマド	表面磨耗著しい

第18号住居跡（第44図）

W－45グリッドに位置する。カマド先端を攪乱に、住居跡内を5本の小ピットによって壊される。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸3.82m、短軸2.88m、深さは0.24～0.29mである。主軸方位はS－82°－Eを指す。

床面ははぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は4層に分けられ、概ね自然堆積と考えられる。

カマドは東壁中央よりやや南寄りに設置される。燃焼部は床面から5cm程度掘り下げられ、更に5cm程低い煙道部へ続く。覆土には明瞭な灰層（e層）が確認され、それに続く黒褐色土層（h層）の上面には薄い焼土層が見られる。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、58×55cmの不整方形で、深さは44cmである。壁溝は北東コーナーから南壁の中央まで検出され、幅20～35cm、深さ6～9cmである。ピットは4本検出され、P2以外は主柱穴と考えられる。P1～P4の深さは、17cm、45cm、29cm、26cmである。床面中央部に床下土坑が1基検出された。

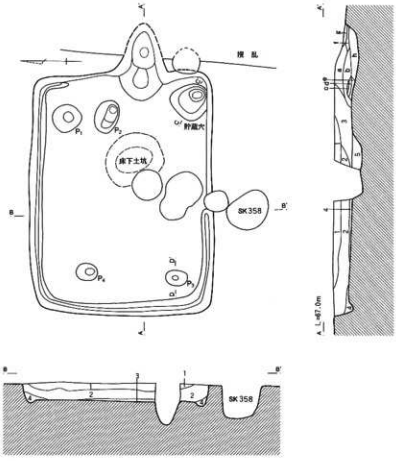
遺物は住居全体から多量に出土しているが、接合率は極めて悪い。カマド前面からは土師器の甕（第45図9）がまとまって出土している。須恵器には蓋、高台付坏、坏、皿等が、土師器には坏、甕等が認められる。須恵器は末野産が多く見られるが、南比企産の坏小片が2片認められる。第45図の10・11は鉄製刀子である。12は土製の紡錘車で、全面に線刻が見られる。何れも磨耗のため鮮明ではないが、上面には4本の同心円を、下面には「王」または「壬」に似たもの（字ではない可能性もある）を9個、側面には格子模様と下面と同じものが1個刻まれている。側面の格子模様は、陰陽道の九字と考えられ、上下面のものも信仰に密接に関わるものと考えられる。(註)

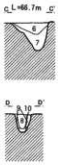
(註) 紡錘車の線刻に関しては宮瀧交二氏より御教示をいただいた。

第18号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋	(16.0)	1.7		ABCF	B	灰	15	覆土	末野産
2	高台坏	(15.3)	6.8	(8.0)	ABF	B	灰	35	貯蔵穴	末野産
3	坏		2.3	(5.8)	AFG	A	灰	50	覆土	末野産
4	坏		2.8	(5.8)	ABCF	B	灰	30	覆土	末野産　底部中心付近小粘土塊付着
5	坏		2.8	(5.8)	AF	B	灰	30	覆土	末野産
6	皿	(14.9)	2.1		AFG	B	灰	25	カマド	末野産
7	皿	14.8	2.2	6.7	ABFG	B	黄灰	70	覆土	末野産
8	坏	(11.6)	2.9	(8.4)	AB'CG	A	橙	20	覆土	
9	甕	(18.5)	(27.5)	(3.8)	AB'CG	B	にぶい橙	30	カマド	内面やや磨耗
10	刀子	現長11.9cm、刃幅最大1.4cm、背幅0.4cm、重さ20.19g　覆土　茎大半欠								
11	刀子	現長5.7cm、刃幅最大1.2cm、背幅0.4cm、重さ13.39g　覆土　刃部破片								
12	紡錘車	上径4.2cm、下径3.4cm、厚さ3.1cm、孔径0.9cm、重さ60.99g　AB'C　橙　覆土　全面に線刻								

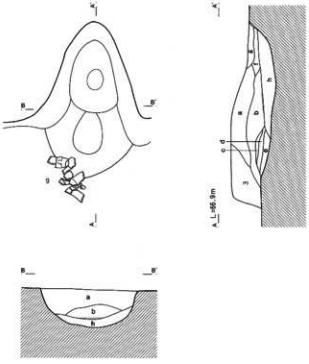
第44図　第18号住居跡





第18号住居跡
1　黒褐色　焼土・白色火山灰少
2　黒褐色　焼土・炭化粒多、ローム粒少
　　白色火山灰微
3　黒褐色　2層と同じ、焼土多
4　黒褐色　ローム粒・焼土少
5　黒褐色　焼土・焼土ブロック・ローム
　　粒多、ロームブロック少、床下土坑
6　黒褐色　焼土・焼土ブロック多、炭化物少
7　黒褐色　焼土・炭化物・ローム粒少
8　黒褐色　炭化物少、白色火山灰多、柱痕
9　暗褐色　ローム粒・ロームブロック多
　　焼土少
10　褐　色　暗褐色土多

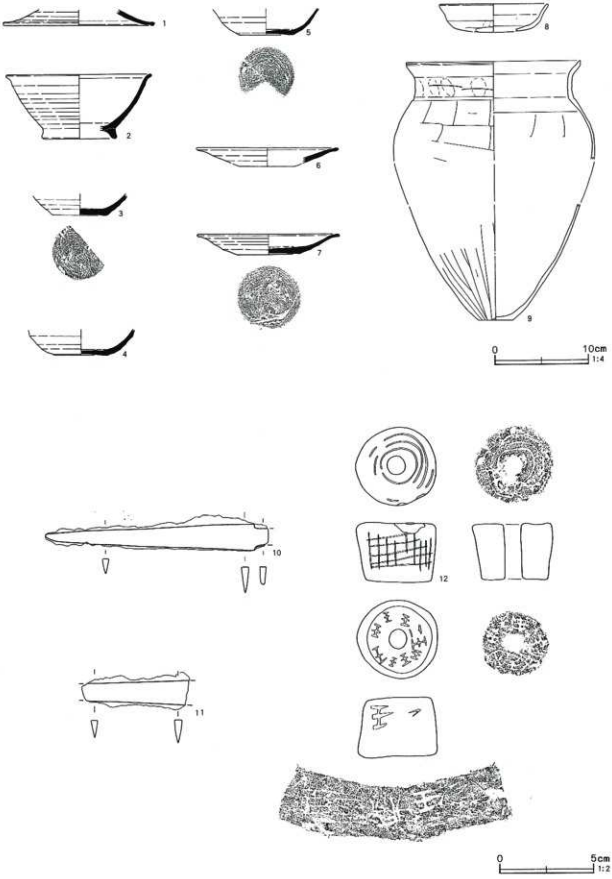
0　2m　1:60



第18号住居跡カマド
a　黒褐色　焼土・ローム粒・ローム
　　ブロック多
b　黒褐色　a層に似るが、ロームブロック
　　炭化物少、最下部の一部に焼土
c　暗褐色　灰・焼土多
d　暗褐色　灰多、焼土少
e　黒褐色　灰層、ローム粒少
f　黒褐色　焼土多、ローム粒少
g　黒褐色　焼土・白色火山灰多
h　黒褐色　ローム粒多、焼土少

0　1m　1:30

第45図　第18号住居跡出土遺物



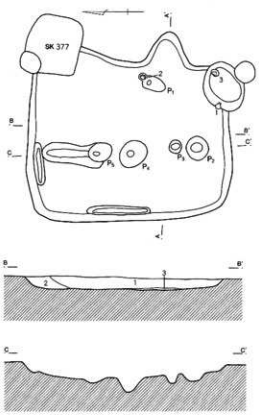
第19号住居跡（第46図）

S－45グリッドに位置する。北東コーナーを第377号土壙に壊される。平面形態は南北に長い長方形で、やや歪んでいる。規模は長軸3.28m、短軸2.35m、深さは0.16～0.20mである。主軸方位はN－1°－Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ち上がる。覆土は3層に分けられ、全体にローム粒子を含んでいる。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部の掘り込みはなく、袖は検出できなかった。貯蔵穴と考えられる落ち込みが南東コーナー部で検出された。80×63cmの楕円形で、深さは15cmである。しかし、一部が壁外に飛び出しているため貯蔵穴とするにはやや疑問が残る。壁溝は北壁と西壁の一部で検出された。幅6～10cm、深さ4cmである。ピットは5本検出された。P1はカマド前面で検出され、深さ37cmである。P2～P5は南北にほぼ一直線に並び、P5からは北壁に向かって溝が延びる。このうち何れかは柱穴と考えられるが、判断できなかった。深さは13cm、15cm、

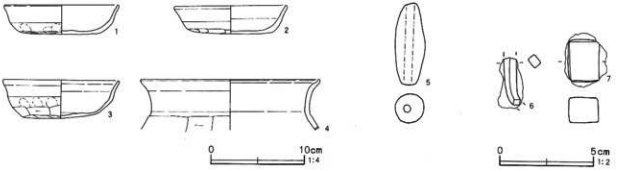
第46図　第19号住居跡



第19号住居跡
1　黒褐色　C　焼土・ローム粒・亜円礫少
2　黒褐色　B　ローム粒・粗砂少
3　黒褐色　C　ローム粒多、焼土少、貼床
第19号住居跡カマド
a　暗褐色　焼土・焼土ブロック多
　　炭化粒少
b　暗褐色　a層に似るが、焼土
　　焼土ブロック多
c　黒褐色　ローム粒多、焼土極少
d　暗褐色　ロームブロック多、焼土微

0　2m　1:60

第47図　第19号住居跡出土遺物



28cm、13cmである。

出土遺物は少量だが、接合率は良い。ほとんどが土師器で、須恵器は器種が判別できないほどの小片が3片見られるだけである。土師器には坏、甕が認められる。他には鉄製品、土錘が見られ、図示できなかったが鉄滓が出土している。

第19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.1	3.1	8.6	ABB'C	B	にぶい赤褐	75	貯蔵穴	やや歪み有り
2	坏	11.8	3.0	9.0	AB'C	C	にぶい赤褐	80	P 1	かなり歪み有り
3	坏	12.2	4.1	8.1	AB'CG	B	にぶい赤褐	95	貯蔵穴	やや歪み有り
4	甕	(19.0)	5.4		AB'		明赤褐	15	覆土	
5	土錘	全長4.4cm、最大径1.6cm、孔径0.4cm、重さ9.14g AG にぶい黄橙 カマド								
6	鉄製品	現長2.5cm、断面幅0.6×0.5cm、重さ3.95g 覆土 角棒状の破片 両側欠								
7	鉄製品	現長2.2cm、断面幅1.6×1.3cm、重さ19.1g 覆土 角柱状の破片								

第20号住居跡（第48図）

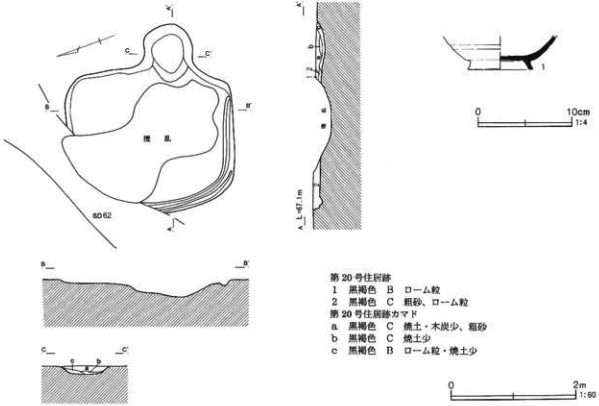
T－44グリッドに位置する。北西コーナーを第62号住居跡に切られ、床面の大半を攪乱に壊されている。平面形態は南北に長い長方形で、やや丸みを持つ。規模は長軸2.70m、短軸2.03m、深さは0.10～0.13mである。主軸方位はS－71°－Eを指す。

床面はほぼ平坦と思われ、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は2層に分けられるが、詳細は不明である。

カマドは東壁中央よりやや南に設置される。全体的に丸みを持ち、掘り込みは浅く、覆土には焼土粒子が少量含まれる程度であった。袖は検出されなかった。貯蔵穴、ピットは検出されなかった。壁溝は南壁から西壁にかけて検出され、幅13～21cm、深さ4cmである。

出土遺物は少なく、接合はほとんどできなかった。図示した須恵器高台付坏は、残高3.6cm、底径6.8cm、色調は灰で、胎土に白色・黒色・無色光沢粒子を含む。残存率は45%で、内外面は磨耗している。

第48図　第20号住居跡・出土遺物



第20号住居跡
1　黒褐色　B　ローム粒
2　黒褐色　C　粗砂、ローム粒
第20号住居跡カマド
a　黒褐色　C　焼土・木炭少、粗砂
b　黒褐色　C　焼土少
c　黒褐色　B　ローム粒・焼土少

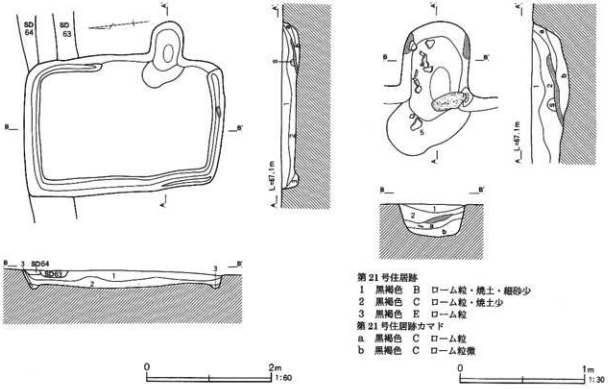
第21号住居跡（第49図）

T－43グリッドに位置する。北壁で第63・64号溝跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形態は南北に長い長方形で、規模は長軸3.19m、短軸2.18m、深さは0.17～0.28mである。主軸方位はS－85°－Eを指す。

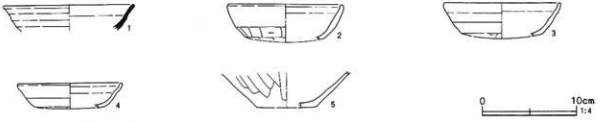
床面は起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は3層に分かれ、概ね自然堆積と考えられる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。床面より5cm程度掘り下げられており、覆土に明瞭な焼土層が確認され、煙道部の左右は焼土化していた。袖は確認されなかったが、右端に袖石と思われる石が倒れた状態で出土している。貯蔵穴、ピットは検出されなか

第49図　第21号住居跡出土遺物



第50図　第21号住居跡出土遺物



第21号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(13.7)	2.7		AG	A	灰白	10	覆土	産地不明
2	坏	(11.9)	3.7	(8.4)	AB'	A	橙	20	覆土	
3	坏	(12.2)	3.5	(8.6)	AB'FG	B	橙	15	カマド	内外面やや磨耗
4	坏	(11.0)	2.6	(7.4)	ABG	A	によい橙	20	覆土	
5	甕？		3.6	(6.3)	B'CG	A	によい黄橙	30	カマド	内外面磨耗

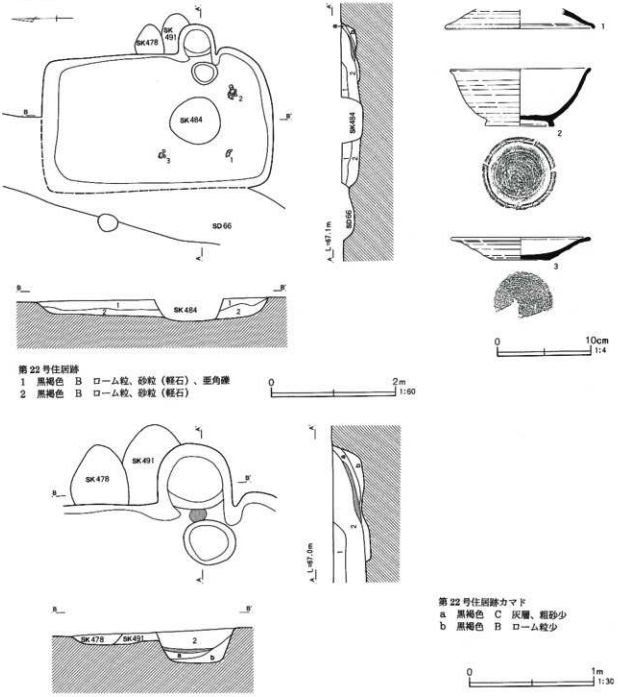
った。壁溝はカマド周辺以外を全周し、幅13～30cm、深さ7～9cmである。掘り形は確認されなかった。

出土遺物は多くなく、接合率は極めて悪い。大半が土師器であり、須恵器は図示した坏と、甕と思われる小片が5片のみである。土師器は坏、甕が認められる。また、貝巣穴痕泥岩が9点出土している。

第22号住居跡（第51図）

R－42グリッドを中心に位置する。北壁から西壁にかけて第66号溝跡に大きく切られるが、本住居跡が深いため床面の検出は可能であった。住居中央を第484号土坑によって壊され、カマド付近では第478・491号土坑を切る。平面形態は南北に長い長方形で、規模は長軸3.75m、短軸2.18m、深さは0.21～0.28

第51図　第22号住居跡・出土遺物



第22号住居跡
1　黒褐色　B　ローム粒、砂粒（軽石）、亜角礫
2　黒褐色　B　ローム粒、砂粒（軽石）

第22号住居跡カマド
a　黒褐色　C　灰層、粗砂少
b　黒褐色　B　ローム粒少

mである。主軸方位はN－2°－Eを指す。

床面は中央付近が低くなる傾向が見られ、壁は開きながら立ち上がる。覆土は2層に分かれ、自然堆積であろう。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。煙道部は丸みを持ち、小さな袖が確認された。燃焼部には焼土の散布が認められる。カマド前面のピットにはカマドから続く灰層で充填されていた。貯蔵穴、壁溝、ピットは検出されなかった。

出土遺物は極めて少量で、須恵器以外は全く接合しない。図示した以外には、須恵器甕小片2と、器種不明の土師器の小片が7片あるのみである。

第22号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋	(15.7)	2.1		ABCFG	B	灰	20	床直	末野産　内外面磨耗著しい
2	高台坏	14.8	6.2	7.4	AF	B	灰	75	床直	末野産　坏部歪み有り
3	皿	(14.6)	2.4	6.3	AF	A	灰	25	床直	末野産

第23号住居跡（第52・53図）

U－41グリッドを中心に位置する。南北に第61・73号溝跡に切られ、東西に攪乱溝によって壊される。しかし、何れよりも本住居跡が深いため、床面の検出は可能であった。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸5.00m、短軸4.25m、深さは0.39～0.43mである。主軸方位はS－85°－Eを指す。

床面は僅かに起伏があり、南側が低くなる傾向が見られる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に大別され、自然堆積と思われる。

カマドは東壁中央より南に設置される。燃焼部は床面から20cm程掘り込まれ、急激に立ち上がり煙道部へ続く。覆土には明瞭な灰層が確認された。袖はローム主体で構築されている。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、直径約60cmの円形で、深さは24cmである。壁溝はカマド右側から北壁にかけて断続的に検出され、幅20～37cm、深さ6～9cmである。ピットは8本検出されたが、何れが柱穴であるかは判断できなかった。P1～P8の深さは、9cm、19cm、20cm、11cm、7cm、42cm、17cm、6cmである。掘り形は床下土坑が5基検出され、北西コーナー部の土坑が最も大きい。

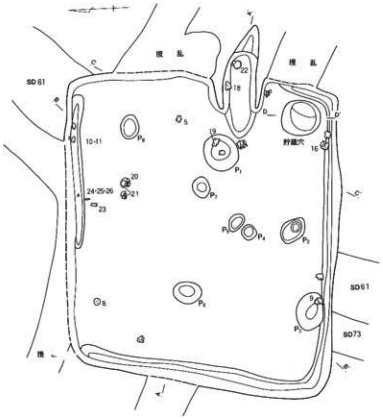
遺物の量は極めて多いが、接合率は悪い。須恵器は蓋、坏等が認められ、図示した以外の110片中に15片の南比企産が認められる。土師器は坏、甕が見られるが、坏の破片が多く、土師器破片全体の6割程度を占める。第54図の6は三足壺と思われるが、底部の3割程度しかなく、足の部分が剥がれ落ちている。8～12は土師器の坏で、平底の底部から内椀気味に立ち上がり、底部のみヘラケズリし、他はヨコナデ調整である。8と9には「中」が墨書されている。「中」の字は最終画が右に大きく曲がっているのが特徴で、同一人物による書き癖と考えられる（註）。貝巣穴滾泥岩が48点出土している。

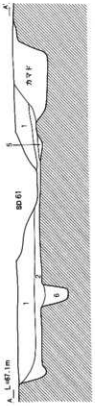
（註）墨書に関しては宮瀧交二氏より御教示をいただいた。

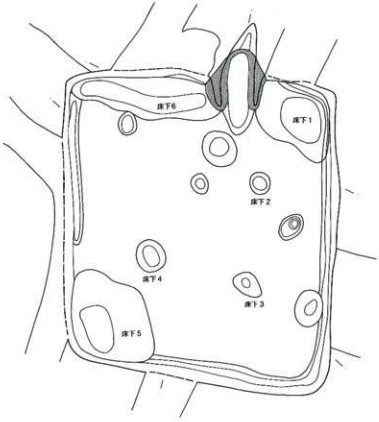
第23号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋		1.3		AB	A	灰	65	覆土	末野産
2	蓋	(14.1)	1.8		AC	C	にぶい黄橙	10	覆土	末野産　内外面磨耗著しい
3	坏	(11.5)	3.7	5.7	AB	A	灰白	65	カマド	猿投産
4	坏	(12.7)	3.6	(6.8)	AD	A	灰	15	床下	南比企産　火襷明瞭
5	坏	(12.8)	3.7	(6.4)	AF	A	灰	35	床直	末野産？　回転糸切り
6	三足壺			(11.0)	A	A	灰黄褐	20	覆土	猿投産　底部内面自然釉

第52図　第23号住居跡(1)

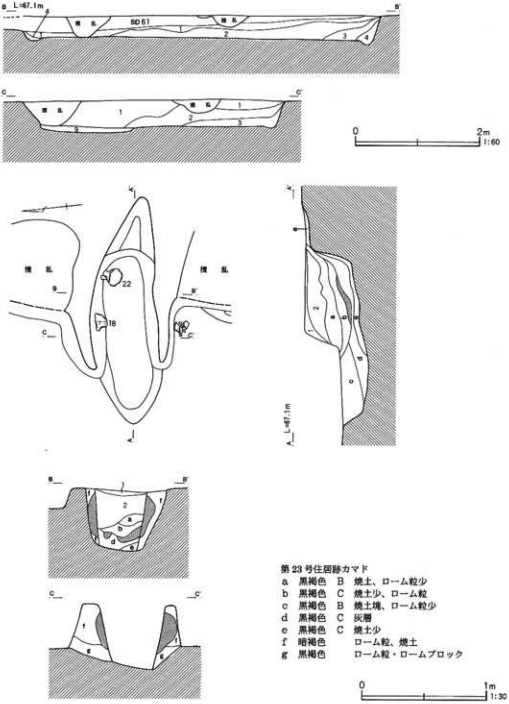




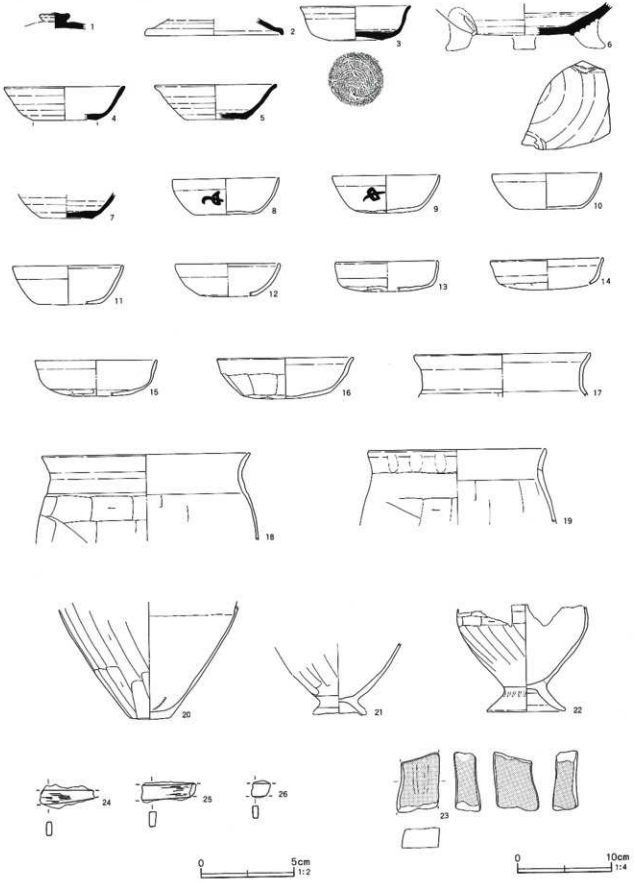


第23号住居跡
1　黒褐色　B　焼土・ローム粒少、亜円礫
2　黒褐色　B　焼土、粗砂、ローム粒
3　黒褐色　B　木炭少、ローム粒、焼土、粗砂
　　亜角礫
4　黒褐色　C　ローム粒・粗砂少
5　黒褐色　ピット7　C　焼土・ローム粒少
6　黒褐色　ピット1　B　亜角礫・ローム粒少
7　黒褐色　B　焼土、ローム粒、火山灰
8　黒褐色　C　焼土・ローム粒・木炭少
9　黒褐色　C　ローム粒・ロームブロック極多

第53図　第23号住居跡(2)



第54図　第23号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
7	坏		2.5	(5.6)	ABD	B	灰	35	覆土	南比企産
8	坏	11.3	3.8	6.8	AB'C	A	赤褐	100	カマド	墨書「中」 底部ヘラケズリ
9	坏	11.4	4.0	6.8	AB'C	B	赤褐	85	P3	墨書「中」
10	坏	11.4	3.8	7.4	AB'C	A	赤褐	85	北壁際	
11	坏	(11.6)	4.1	(6.5)	ABC	B	明赤褐	80	北壁際	
12	坏	(11.0)	3.4	(6.0)	ABG	A	橙	20	覆土	内外面磨耗著しい
13	坏	(10.8)	3.2	(9.6)	AB'G	B	によい黄橙	50	南壁際	内外面磨耗著しい 歪み有り
14	坏	(12.0)	2.8	10.3	AB'	A	赤褐	30	覆土	内外面磨耗著しい
15	坏	(12.8)	3.8	(10.1)	AB'	B	明赤褐	30	覆土	内外面磨耗著しい 歪み有り
16	坏	14.4	4.3	9.3	AB'C	C	明赤褐	80	覆土	内外面磨耗著しい
17	甕	(18.6)	4.6		AB'	A	によい橙	15	カマド	
18	甕	(22.0)	9.2		AB'C	B	橙	20	カマド	内外面磨耗著しい
19	甕	(18.7)	7.9		AB'C	B	橙	20	P1	外面磨耗
20	甕		12.5	4.2	AB'CF	A	によい橙	50	床直	
21	台付甕		7.6		ABG	C	によい黄橙	70	床直	内外面磨耗
22	台付甕		11.3	8.1	AB'C	A	明赤褐	85	カマド	
23	砥石	長さ6.2cm、断面幅1.9×3.9cm、重さ102.5g 床直 凝灰岩 四面使用								
24	鉄製品	現長2.9cm、断面幅0.7×0.3cm、重さ2.71g 北壁際 角棒状の破片 24～26は同一個体か								
25	鉄製品	現長2.9cm、断面幅0.8×0.4cm、重さ3.05g 北壁際 角棒状の破片								
26	鉄製品	現長1.0cm、断面幅0.7×0.3cm、重さ0.56g 北壁際 角棒状の破片								

第24号住居跡（第55～57図）

U－40グリッドを中心に位置する。一部を攪乱に壊されるが、本住居跡が深いため、床面は確認できた。また、第72号溝跡とは本住居跡断面に溝跡が検出されていないことから、本住居跡が新しいと考えられる。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸5.30m、短軸4.05m、深さは0.47～0.53mである。主軸方位はS－86°－Eを指す。

床面はほぼ平坦だが、南壁の近くでは段を持って10cm程度下がっている。壁は開き気味に立ち上がる。覆土は全体に炭化粒子を含んでいる。

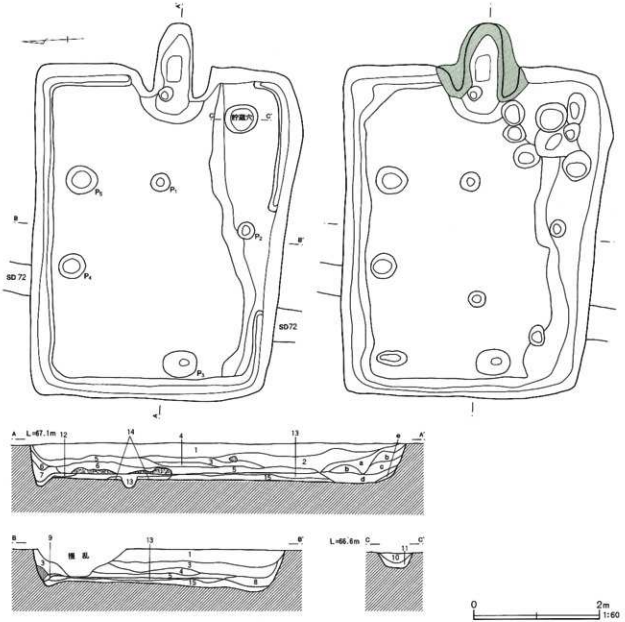
カマドは東壁のほぼ中央に位置し、床面を15cm程掘り込んで、煙道部先端は急激に立ち上がる。覆土下層には明瞭な灰層が残存しており、袖はロームを主体に構築されていた。

貯蔵穴は南東コーナー近くに位置し、直径約50cmの円形で、深さは23cmである。壁溝は南壁中央で切れる以外は全周し、幅28～39cm、深さ4～14cmである。ピットは5本検出されたが、主柱穴と判断することはできなかった。P1～P5の深さは、18cm、14cm、22cm、21cm、21cmである。掘り形は、床面全体を掘り下げており、貯蔵穴周辺にピットが集中している。

本住居は消失住居と考えられ、床面、特に西半部において炭化材、炭化物、焼土が集中して検出された。

遺物は住居全体から極めて多量に出土したが、接合率は良くない。須恵器の量も多く、蓋、坏、高台付坏、壺、甕等が認められる。土師器は坏、甕、台付甕等が見られ、特に坏片の多さが目に付く。他には、土錘、鉄製品が見られる。第59図の34は円筒状の土製品で、作りは雑である。全体に被熱し、内面は赤化しており、カマドから出土していることから支脚かと思われるが、大きさに疑問が残る。貝巣穴痕泥岩が48点出土している。

第55図　第24号住居跡(1)



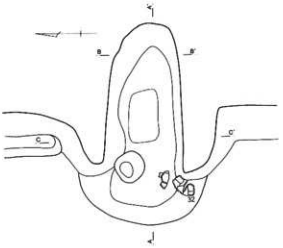
第24号住居跡

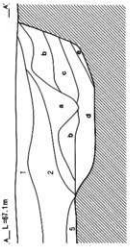
1　暗褐色　細砂質シルト　木炭少,焼土,ローム粒、亜円礫
2　黒褐色　シルト質細砂　ローム粒、亜角礫・木炭・焼土少
3　黒褐色　C　木炭,亜角礫、焼土、ローム粒
4　黒褐色　B　焼土、木炭、ローム粒
5　黒褐色　C　木炭、焼土、ローム粒
6　黒褐色　C　亜角礫・木炭少、ローム粒
7　黒褐色　C　木炭（塊）、ローム粒、焼土
8　黒褐色　C　ローム粒少、亜角礫
9　黒褐色　C　ローム粒、焼土
10　黒褐色　C　ローム粒・粗砂少、焼土微
11　黒褐色　C　ローム粒・焼土少、亜角礫微
12　暗褐色　C　ロームブロック、亜角礫、貼床
13　暗褐色　C　ロームブロック・粗砂少、貼床
14　暗褐色　C　ロームブロック・細砂微、貼床
15　暗褐色　C　ロームブロック、亜角礫少、貼床

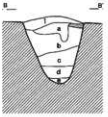
第24号住居跡出土遺物観察表

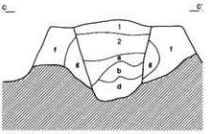
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	壺	3.3	1.3		AFG	A	灰	80	覆土	末野産
2	壺	(16.7)	2.7		ADF	C	灰	15	覆土	南比企産
3	壺	(16.1)	2.0		AD	A	灰	10	覆土	南比企産
4	坏	(12.6)	3.7	(7.4)	A	A	灰	45	P 2	産地不明

第56図　第24号住居跡(2)





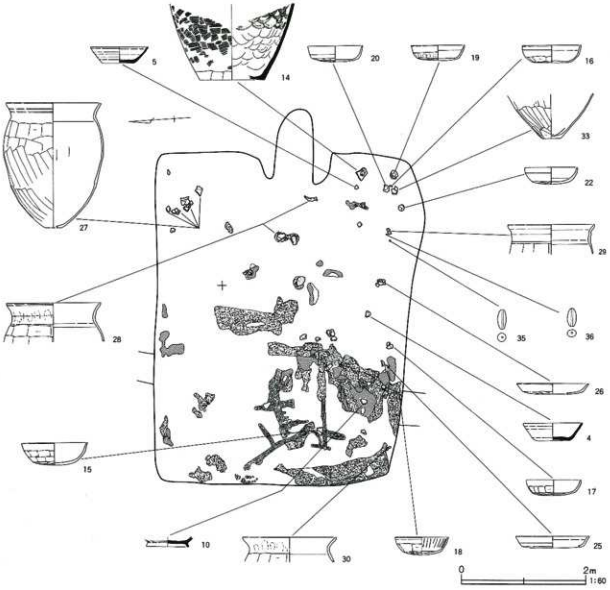




第24号住居跡カマド
a　黒褐色　C　焼土、ローム粒少、粗砂
b　黒褐色　C　焼土塊、ローム粒少
c　黒褐色　C　焼土・灰多
d　黒褐色　C　灰層、焼土・木炭少
e　黒褐色　C　焼土・木炭・灰少
f　暗褐色　C　ローム粒粗砂、亜角礫
g　暗褐色　C　ローム粒、細砂

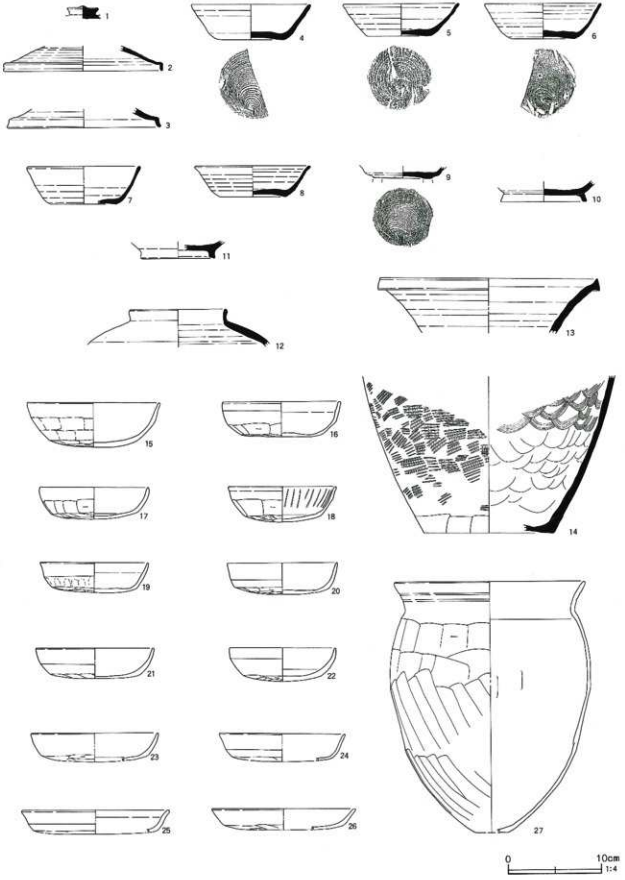
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
5	坏	12.2	3.4	6.4	AF	C	灰	65	床直	産地不明　内外面磨耗著しい
6	坏	(12.2)	3.7	6.9	AB	B	灰	30	覆土	産地不明
7	坏	(11.8)	4.0	(7.0)	AFG	A	灰白	20	覆土	末野産
8	坏	(12.1)	3.3	7.0	ABF	A	灰	35	覆土	末野産　回転糸切り
9	坏		1.3	6.3	AD	A	灰	80	覆土	南比企産
10	高台坏		2.2	9.0	AFG	C	灰	80	床直	末野産　外面磨耗著しい
11	高台坏		1.8	7.8	ABC	B	灰	30	覆土	末野産　内外面やや磨耗
12	短頸壺	(10.1)	4.0		A	A	灰	15	覆土	頸部自然釉　産地不明
13	甕	(23.0)	5.8		AD	A	灰	20	カマド	南比企産
14	甕		16.6	(14.0)	AD	A	灰	25	東壁際	南比企産
15	坏	14.0	4.7	8.9	AB'	A	明赤褐	60	床直	内外面磨耗著しい
16	坏	12.4	3.7	8.7	AB'G	A	にぶい橙	85	南壁際	頸部自然釉　産地不明
17	坏	11.4	3.3	9.2	AB'	C	にぶい橙	80	南壁際	内外面やや磨耗
18	坏	13.3	3.8	8.0	AB'G	B	にぶい橙	90	床直	内外面磨耗著しく暗文不明瞭
19	坏	11.4	3.2	9.1	AB'G	B	にぶい橙	80	東壁際	やや歪み有り
20	坏	11.6	3.4	9.8	AB'C	A	にぶい橙	75	床直	内面やや磨耗
21	坏	(12.3)	3.3	(9.5)	AB'G	B	にぶい橙	45	覆土	内外面磨耗著しい
22	坏	11.2	3.6	8.3	AB'C	B	橙	90	南壁際	内面やや磨耗

第57図　第24号住居跡(3)

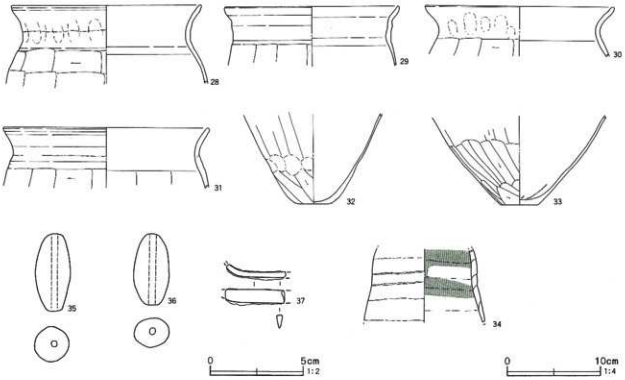


番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
23	坏	(13.4)	2.9	(11.4)	AB'	B	明赤褐	20	カマド	
24	坏	(13.2)	2.8	(10.6)	AB'C	B	橙	20	覆土	内外面磨耗著しい
25	皿	(15.5)	2.4	(13.2)	AB'	A	にぶい橙	20	南壁際	
26	皿	(15.2)	2.2	(12.6)	AB'G	A	橙	20	床直	内外面やや磨耗
27	甕	(20.1)	26.6	(3.6)	AB'G	C	橙	40	北壁際	内外面磨耗著しい
28	甕	(20.0)	8.3		AB'	B	橙	35	カマド	内外面磨耗著しい
29	甕	(18.3)	6.3		AB'C	A	橙	20	床直	
30	甕	(19.9)	5.3		AB'C	A	橙	15	南壁際	内外面磨耗著しい
31	甕	(21.6)	6.4		AB'C	B	橙	20	覆土	
32	甕		9.5	(3.8)	AB'C	B	にぶい橙	45	カマド	内外面やや磨耗
33	甕		9.5	4.0	AB'FG	A	明赤褐	50	南壁際	
34	土製品	上径10.1cm、下径12.8cm、器高7.8cm　AFG　B　にぶい橙　25　カマド　全体(特に上半部)被熱　内面赤化								
35	土錘	全長4.1cm、最大径1.1cm、孔径0.4cm、重さ14.07g　AB'F　にぶい橙　床直								
36	土錘	全長3.8cm、最大径1.9cm、孔径0.3cm、重さ11.17g　ACG　にぶい橙　床直								
37	刀子	現長3.2cm、刃幅最大0.7cm、背幅0.2cm、重さ2.34g　覆土　刃部(切先近く)破片								

第58図　第24号住居跡出土遺物(1)



第59図　第24号住居跡出土遺物(2)



第25号住居跡（第60図）

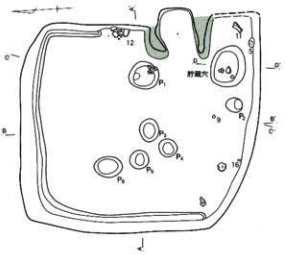
T－41グリッドに位置する。第26・27号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。平面形態は南北に僅かに長いが、方形に近くやや歪んでいる。規模は長軸3.85m、短軸3.25m、深さは0.25～0.30mである。主軸方位はN－90°－Eを指す。

床面は平坦で、壁は開きながら立ち上がる。覆土は2層に分かれ、短期間で埋没した自然堆積と思われる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置され、床面より10cm程度高く、皿状に立ち上がる。遺存状態は良くないが、覆土最上層に明瞭な焼土層が残存し、その下層に灰層が確認された。袖はロームと火山灰を含む土で構築されていた。貯蔵穴はカマド右に位置し、67×55cmの長円形で、深さは20cmである。壁溝はカマド左から西壁にかけて検出され、幅18～47cm、深さ4～10cmである。ピットは6本検出されたが、何れが柱穴であるか判断できなかった。P1～P6の深さは、3cm、16cm、12cm、16cm、14cm、16cmである。

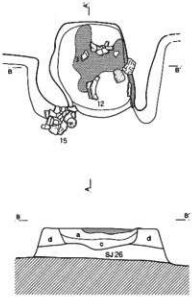
遺物量は多いが接合率は良くない。須恵器は、坏、高台付坏、皿等が認められ、特に高台付坏の破片が目立つ。須恵器片119片中に3片の南比企産が含まれている。土師器は坏、甕、台付甕等が見られる。第61図の8は、第23号住居跡で出土した坏と同様な、底部のみヘラケズリするタイプのものである。9は、ミニチュアで、黒色土器と考えられる。外面底部はヘラケズリの後ナデ調整をしているのか明瞭でない。口縁部は細かいミガキを施している。内面口縁部は外面同様にミガキであるが、底部は明瞭でなく放射状暗文のように見える。16は、刀子の刃から茎部の破片である。背関は浅く、両端ともに欠損し、割れ口は古い。17は鉄製釘の基部から脚部の破片で、割れ口が新しい。

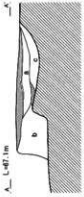
第60図　第25号住居跡



第25号住居跡
1　黒褐色　C　焼土・ローム粒・浅間B少、亜角礫
2　黒褐色　C　木炭少、焼土、ローム粒
3　黒褐色　B　ローム粒
4　黒褐色　C　焼土、ローム粒、細砂

0　2m
1:60

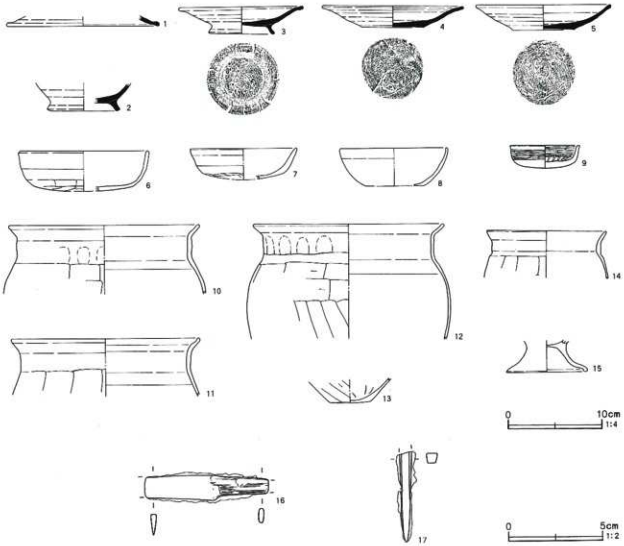




第25号住居跡カマド
a　灰黄褐色　灰層、焼土
b　黒褐色　焼土・亜角礫少、ローム粒
c　黒褐色　B　焼土・ローム粒少
d　黒褐色　C　白色火山灰少、ローム粒

0　1m
1:30

第61図　第25号住居跡出土遺物



第25号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	(16.0)	1.1		ABG	C	灰黄	10	覆土	末野産　内外面磨耗著しい
2	高台坏		3.0	(7.0)	ABC	A	灰	35	覆土	末野産
3	高台皿	13.0	3.0	6.9	AFG	A	灰	95	覆土	末野産　全体に歪み有り
4	皿	(14.9)	2.3	6.7	ABG	A	灰	50	覆土	末野産
5	皿	14.1	2.7	6.6	AF	A	暗青灰	100	南壁際	末野産
6	坏	(13.6)	3.0	(12.2)	B'G	B	褐	20	覆土	内外面磨耗著しく調整不明瞭
7	坏	(11.2)	3.2	(8.6)	AB'C	B	にぶい赤褐	40	覆土	
8	坏	(11.4)	4.0	(6.0)	ABG	A	赤褐	20	覆土	
9	ミニチュア	7.3	2.4	5.1	AB'G	B	黒	100	床直	黒色土器　胎土細かく丁寧なつくり
10	甕	(20.1)	7.4		AB'C	B	橙	10	カマド	
11	甕	(19.9)	6.2		AB'G	A	橙	20	床直	内外面磨耗著しい
12	甕	(20.0)	12.2		AB'C	B	にぶい橙	40	カマド・床直	
13	甕		2.5	(4.4)	AG	B	にぶい褐	40	覆土	
14	甕	(12.6)	5.0		AB'C	A	橙	20	覆土	内面やや磨耗
15	台付甕		3.5	8.4	AB'G	A	赤褐	80	カマド	
16	刀子	現長6.6cm、刃幅最大1.4cm、背幅0.3cm、重さ12.48g　南壁際　刃～茎部破片								
17	釘	現長4.8cm、断面幅0.6×0.6cm、重さ4.18g　覆土　基部～脚部破片								

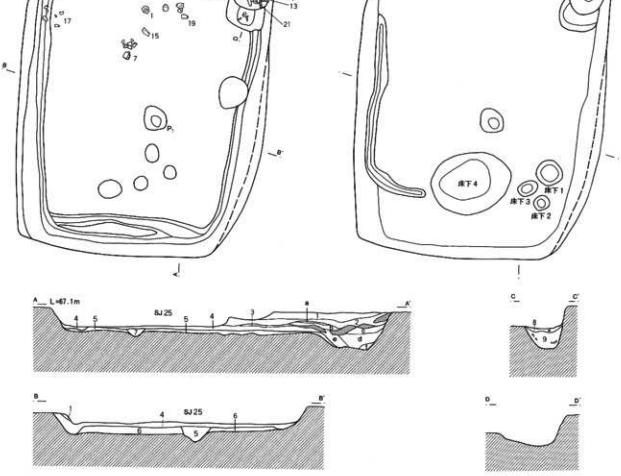
第26号住居跡（第62・63図）

T－41グリッドに位置する。第25・27・28号住居跡、第556・557号土坑と重複する。第25号住居跡、第556・557号土坑に切られ、他を切る。床面の一部を5本の小ピットによって壊される。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸4.81m、短軸3.91m、深さは0.25～0.33mである。主軸方位はS－86°－Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ち上がる。覆土は概ね5層に別れるが、上層は第25号住居跡によって壊されていたため詳細は不明である。

カマドは東壁中央よりやや南寄りに設置される。床面から20cm程掘り込まれ、覆土中層には明瞭な焼土層が、下層には灰層が残存していた。袖は確認できな

第62図　第26号住居跡(1)



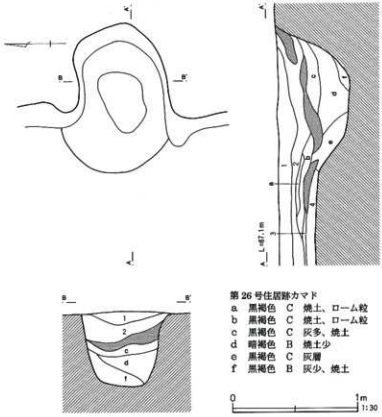
第26号住居跡
1　黒褐色　シルト質細砂　焼土・ローム粒・粗砂少、白色粗砂
2　黒褐色　シルト質細砂　焼土・炭化物・ローム粒・白色粗砂少
3　黒褐色　細砂質シルト　焼土・ローム粒少、細砂
4　暗褐色　細砂質シルト　焼土、ローム粒、亜角礫、細砂
5　暗褐色　細砂質シルト　焼土・ローム粒少
6　暗褐色　シルト　ロームブロック細砂少、貼床
7　暗褐色　シルト質細砂　焼土・ローム粒少
8　黒褐色　C　木炭、焼土、ローム粒
9　黒褐色　C　木炭、焼土、ローム粒

0　2m
1:60

かった。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、96×59cmの不整長方形で、西側がやや高くなる。深さは32cmである。壁溝はほぼ全周し、幅18～28cm、深さ6～15cmである。ピットは中央部に1本検出した。直径45cmで深さ17cmである。掘り形は床面全体を掘り下げられ、床下土坑（ピット）が4基検出された。

出土遺物は多量に見られたが、接合率は悪い。第25号住居跡に切られていない東半部からの出土が目立ち、特に貯蔵穴から多く出土した。須恵器は蓋、坏、皿、甕等、土師器は坏、甕、台付甕等が確認された。

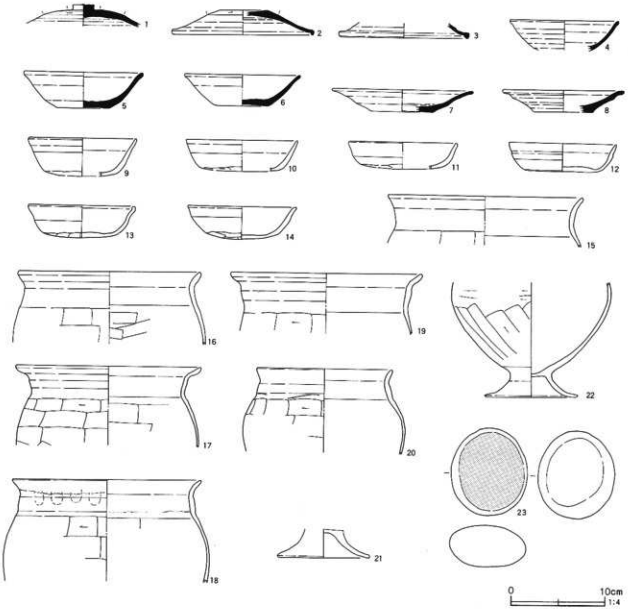
第63図　第26号住居跡(2)



第26号住居跡出土遺物観察表

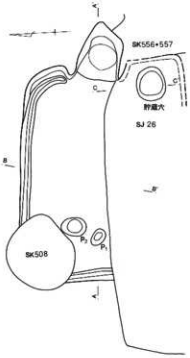
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋		2.3		ABF	C	灰	65	床直	末野産
2	蓋	(14.9)	2.6	(5.0)	AF	B	灰	20	カマド	末野産　天井部回転糸切り
3	蓋	(13.3)	1.6		AB	B	灰	10	覆土	末野産
4	坏	(11.4)	3.2		ABF	A	灰	35	覆土	末野産　内外面やや磨耗
5	坏	(12.5)	3.8	(5.8)	AB'CF	B	灰	45	覆土	末野産　内外面磨耗
6	坏	(12.3)	3.3	(5.8)	ABCG	C	によい黄橙	40	覆土	産地不明　内外面磨耗著しい
7	皿	(14.7)	3.3	(6.6)	ABCF	B	黄灰	20	床直	末野産
8	皿	(12.4)	2.3	(6.2)	AB	A	灰白	15	覆土	末野産　回転糸切りか？　磨耗
9	坏	(11.4)	4.0	(7.8)	ABG	B	橙	35	覆土	内外面磨耗著しく調整不明瞭
10	坏	(11.8)	(3.2)	(8.9)	AB'C	A	橙	20	貯蔵穴	
11	坏	(11.3)	(2.7)	(9.0)	AB'	A	橙	20	カマド	
12	坏	11.3	3.0	7.8	ABG	B	によい橙	80	覆土	内外面磨耗著しく調整不明瞭
13	坏	11.3	3.4	7.9	AB'G	A	明赤褐	85	貯蔵穴	
14	坏	11.4	3.4	7.8	AB'C	A	橙	95	貯蔵穴	
15	甕	20.6	5.2		AB'C	A	明褐	20	貯蔵穴	内外面磨耗著しい

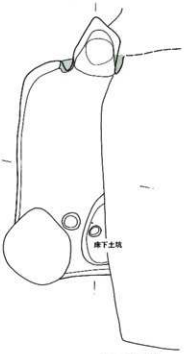
第64図　第26号住居跡出土遺物

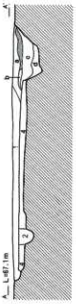


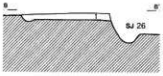
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
16	甕	(19.3)	7.7		AB'G	A	橙	20	覆土	
17	甕	(19.6)	8.5		AB'G	B	によい橙	35	北壁際	
18	甕	(20.0)	10.8		AB'C	B	によい赤褐	20	カマド	
19	甕	(20.1)	6.4		AB'CF	C	橙	20	床直	内外面磨耗著しい
20	甕	(14.2)	8.9		AB'C	A	橙	25	覆土	
21	台付甕		(3.0)	9.5	AB'	A	橙	100	貯蔵穴	
22	台付甕		12.2	9.6	AB'G	B	によい赤褐	60	覆土	内外面磨耗著しい
23	磨石	幅9.2×8.1cm、厚さ4.4cm、重さ430.92g　覆土　安山岩								

第65図　第27号住居跡



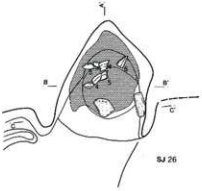


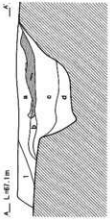




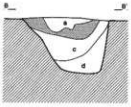
第 27 号住居跡
1　黒褐色　B　焼土、ローム粒
2　黒褐色　B　焼土微、ローム粒、粗砂少
3　黒褐色　C　ローム・粗砂少、焼土微
4　暗褐色　シルト　ロームブロック多、粗砂少、貼床

0　2m
1:60





第 27 号住居跡カマド
a　黒褐色　B　焼土・ローム粒少
b　黒褐色　B　焼土・細砂少
c　黒褐色　B　焼土・ローム粒少
d　暗褐色　C　ローム粒少
e　黒褐色　C　焼土微、亜円礫・ローム粒少



0　1m
1:30

第27号住居跡（第65図）

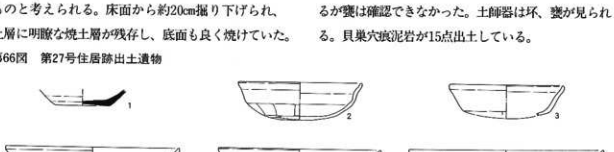
T－41グリッドに位置する。第25・26・28号住居跡、第508・556・557号土坑と重複する。第28号住居跡を切り、他の遺構に切られるため、北半部のみ検出された。平面形態は東西に長い長方形と考えられ、東西3.44m、南北の残長1.30m、深さは0.08～0.14mである。主軸方位はS－86°－Eを指す。

床面はやや起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は1層だが、深度が浅いため詳細は不明である。

カマドは東壁に設置され、中央或いはやや北に寄るものと考えられる。床面から約20cm掘り下げられ、上層に明瞭な焼土層が残存し、底面も良く焼けていた。右袖は、多くを第26号住居跡に壊されていたが、内側に片岩が残存していた。第26号住居跡の床面に本住居の貯蔵穴と考えられる落ち込みが検出された。直径約50cmの円形で、本住居の床面からの深さは37cmである。壁溝は検出された部分で全周する。幅15～20cm、深さ4～6cmである。ピットは2本検出され、深さは13cm、10cmである。掘り形は床面全体を掘り下げ、床下土坑が1基検出された。

出土遺物は多く見られるが、接合率は悪い。カマドから土師器甕が出土している。須恵器には坏は見られるが甕は確認できなかった。土師器は坏、甕が見られる。貝巣穴痕泥岩が15点出土している。

第66図　第27号住居跡出土遺物



第27号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏		1.8	(5.8)	AG	B	灰	40	覆土	産地不明
2	坏	(12.8)	4.0	(7.6)	AB'G	A	明赤褐	30	覆土	
3	坏	(12.0)	3.2	(9.1)	ABG	A	にぶい橙	20	カマド	内外面磨耗著しい
4	甕	(20.6)	6.1		AB'G	A	橙	25	カマド	内外面磨耗著しく調整不明瞭
5	甕	(17.2)	5.1		AB'CG	A	橙	25	カマド	内外面磨耗著しい
6	甕	(18.4)	4.9		AB'G	B	にぶい橙	20	カマド	

第28号住居跡（第67図）

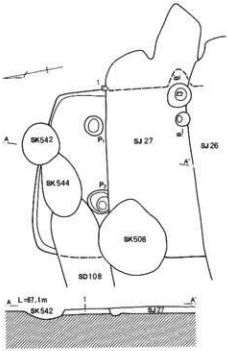
T－41グリッドに位置する。第26・27号住居跡、第508・542・544号土坑、第108号溝跡と重複し全てに切られる。このため、住居の詳細は不明な点が多い。平面形態は南北に長い長方形と思われ、残存する北壁は2.48m、南北の残長は0.89m、深さは0.08mである。北壁の方位はN－72°－Wを指す。

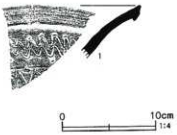
確認された床面は僅かだが、ほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は1層のみだが、埋め戻された形跡はなかった。

第27号住居跡の床面に、焼土粒子、灰粒子を含んだピットが検出された。第27号住居跡には伴わないため、北壁からやや離れてしまうが、本住居跡のカマドの残存と考えた。貯蔵穴は確認されなかった。おそらく第26号住居跡によって壊されたものと考える。ピットは2本検出され、位置的に柱穴の可能性が高い。それぞれの深さは、9cm、13cmである。

出土遺物は極めて少量で、土師器坏、甕の小片が8片あるのみである。図示した須恵器甕は胎土に小礫を含み、色調は灰色で、東壁際から出土した。

第67図　第28号住居跡・出土遺物





第28号住居跡
1　黒褐色　焼土・ローム粒少、細砂
第28号住居跡カマド
a　黒褐色　C　焼土、灰少
b　黒褐色　B　焼土少、ローム粒
c　黒褐色　B　炭化物・亜角礫少

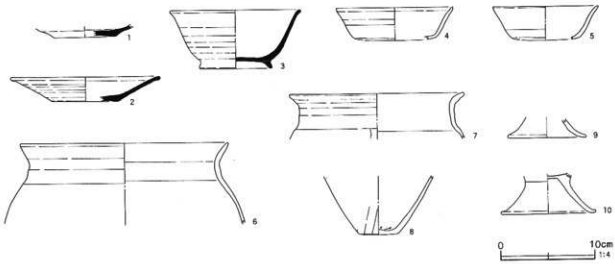
第29号住居跡（第69図）

Q－37グリッドを中心に位置する。第101・104号溝跡を切り、南壁の中央を小ピットで壊される。平面形態は南北に長い長方形で、規模は長軸3.47m、短軸2.26m、深さは0.10～0.23mである。主軸方位はS－88°－Eを指す。

床面はほぼ平坦だが、南に向ってやや下がる傾向が見られる。壁は開き気味に立ち上がり、覆土は3層に分かれ、埋め戻された可能性もある。

カマドは東壁ほぼ中央に設置され、床面から8cm程掘り下げられている。袖はローム主体で構築されている。貯蔵穴は南東コーナー部に位置し、45×51cmの長方形で、深さは9cmである。壁溝は西壁中央で切れる。幅10～20cm、深さ3～6cmである。ピットは重なって2本、カマド前面に検出された。それぞれの深さは、9cm、17cmである。カマドに付帯する可能性が

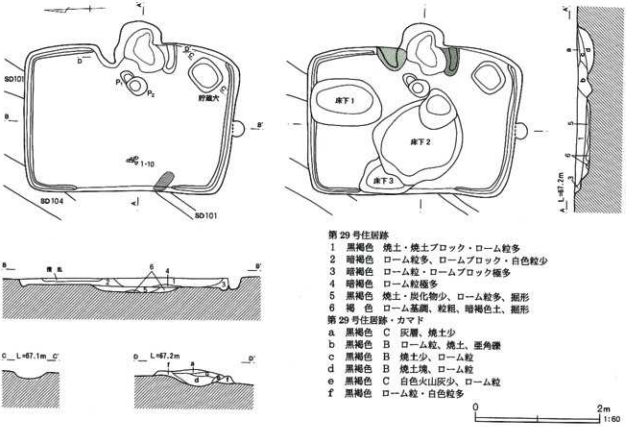
第68図　第29号住居跡出土遺物



高い。掘り形は床面全体が掘り下げられ、床下土坑が3基検出された。

出土遺物は多いが、接合率は極めて悪い。須恵器は、坏、高台付坏、皿等が、土師器には坏、甕、台付甕が認められる。図示した以外では、須恵器の大半が坏小片で、20片程度、土師器は甕胴部片である。

第69図　第29号住居跡



第29号住居跡
1　黒褐色　焼土・焼土ブロック・ローム粒多
2　暗褐色　ローム粒多、ロームブロック・白色粒少
3　暗褐色　ローム粒・ロームブロック極多
4　暗褐色　ローム粒極多
5　黒褐色　焼土・炭化物少、ローム粒多、掘形
6　褐　色　ローム基調、粒粗、暗褐色土、掘形
第29号住居跡・カマド
a　黒褐色　C　灰層、焼土少
b　黒褐色　B　ローム粒、焼土、亜角礫
c　黒褐色　B　焼土少、ローム粒
d　黒褐色　B　焼土塊、ローム粒
e　黒褐色　C　白色火山灰少、ローム粒
f　黒褐色　ローム粒・白色粒多

0　2m
1:60

第29号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	皿		1.2	(6.6)	ABC	B	にぶい橙	35	床直	末野産　土師質
2	皿	(15.7)	2.6	(7.0)	AB'F	C	にぶい黄橙	25	覆土	末野産　土師質　内外面磨耗
3	高台坏	(13.7)	6.2	(7.6)	AB	B	灰	35	覆土	末野産　内外面磨耗
4	坏	(12.3)	3.3	(8.7)	AB'	C	にぶい橙	30	覆土	内外面磨耗著しい
5	坏	(11.0)	3.5	(7.2)	AB'	B	明赤褐	25	覆土	内外面磨耗著しく調整不明瞭
6	甕	(22.0)	8.7		AB'C	A	明赤褐	20	覆土	内外面磨耗著しく調整不明
7	甕	(18.4)	4.9		AB'C	B	明赤褐	10	覆土	
8	甕		6.3	4.0	ABCG	B	にぶい橙	35	覆土	内外面磨耗著しい
9	台付甕		(2.2)	8.0	ABG	B	明褐	80	覆土	
10	台付甕		4.2	(9.7)	AB'	B	明赤褐	40	床直	内外面磨耗著しい

第30号住居跡（第70図）

Q－36グリッドを中心に位置する。南北に第95・96・97号溝跡に切られ、遺存状態は極めて悪く、掘り形の一部が検出されただけである。平面形態は東西に長い長方形になると考えられる。東西の残長2.85m、南北は3.38m、深さは0.12～0.19mである。主軸方位はS－74°－Eを指す。

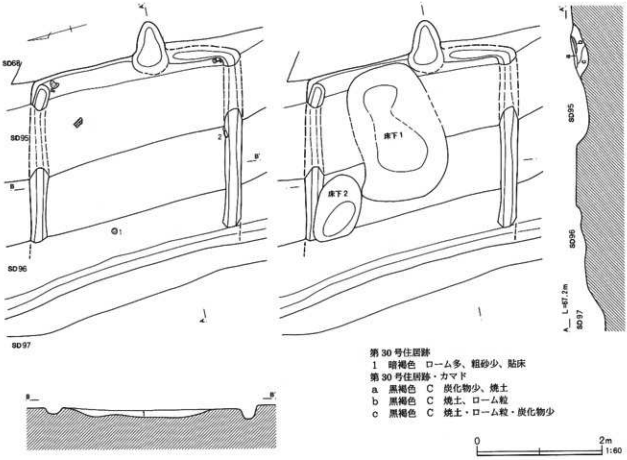
床面、壁はすでに壊されており、詳細は不明とせざ

るを得ない。

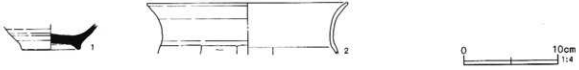
カマドは東壁中央よりやや南寄りに設置され、焼土層が残存していた。貯蔵穴、ピットは検出されなかった。壁溝は北壁と南壁に検出され、幅25～31cmと広く、深さ12～16cmである。検出された部分が掘り形であるが、床下土坑と考えられる落ち込みが2基検出された。

出土遺物は少なく、図示した以外には須恵器片1と土師器甕片が見られる程度である。

第70図　第30号住居跡



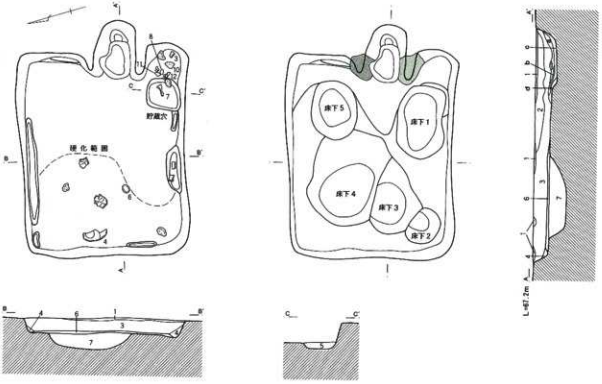
第71図　第30号住居跡出土遺物



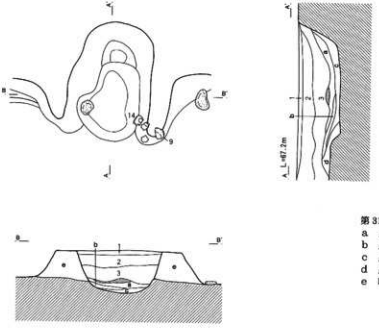
第30号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	高台坏		2.7	6.0	AB	A	灰	70	床直	末野産　外面磨耗剥落
2	甕	(21.2)	5.5		AB'C	B	橙	20	南壁際	

第72図　第31号住居跡



第31号住居跡
1　暗オリーブ褐色　シルト質火山灰、浅間A
2　暗褐色　B　焼土・ローム粒・粗砂少
3　黒褐色　シルト質火山灰　焼土ブロック多、炭化物少
4　暗褐色　シルト質火山灰　ローム小ブロック少・焼土・炭化物少
5　暗褐色　有機質シルト　焼土小ブロック・炭化物小ブロック・焼土・炭化粒多
6　暗褐色　粘土質シルト　焼土小ブロック・ローム小ブロック多、貼床
7　暗褐色　細砂質シルト　焼土小ブロック少、ローム小ブロック極多、床下土坑



第31号住居跡カマド
a　黒褐色　C　灰層
b　黒褐色　C　ローム粒・焼土少
c　黒褐色　C　灰層、焼土、ローム粒
d　黒褐色　B　焼土、ローム粒
e　暗褐色　袖　焼土・ローム粒少

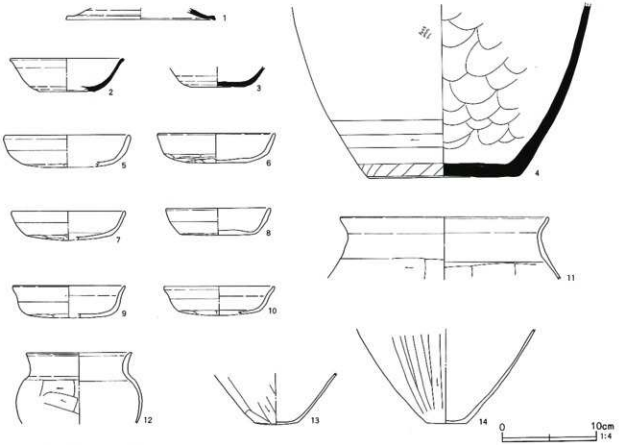
第31号住居跡（第72図）

S－35グリッドに位置する。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸3.36m、短軸2.54m、深さは0.24～0.27mである。主軸方位はS－73°－Eを指す。

床面はやや起伏があり、東半部において硬化面が確認された。壁は開き気味に立ち上がる。覆土は4層に大別されるが、最上層（1層）は近世以降の耕作土であろう。

カマドは東壁中央より僅かに南に設置される。底面は8㎝程掘り込み、急激に立ち上がる。下層には明瞭な灰層が残存する。袖は焼土粒子、ロームを含む土で構築されている。貯蔵穴はカマド右に位置し、南壁に

第73図　第31号住居跡出土遺物



第31号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋	(15.8)	1.2		AB	A	灰	15	覆土	産地不明
2	坏	(11.8)	1.6	(6.0)	AB	B	灰	20	床下	末野産　内外面やや磨耗
3	坏		2.1	(5.8)	AFG	B	灰	40	東壁際	末野産　底部回転糸切り
4	甕		18.3	16.4	A	A	灰	40	床直	産地不明
5	坏	(13.1)	3.3	(9.6)	AB'CG	B	橙	20	覆土	内外面磨耗著しい
6	坏	12.2	3.1	11.0	AB'	B	橙	95	床直	
7	坏	(12.0)	3.0	(9.0)	AB'	B	にぶい橙	25	貯蔵穴	内外面やや磨耗
8	坏	(11.0)	2.8	(8.0)	AB'G	A	橙	40	床直	
9	坏	(11.8)	3.4	(9.0)	AB'G	A	にぶい橙	25	カマド	内外面やや磨耗
10	坏	(11.6)	3.0	(8.6)	AB'	B	にぶい褐	30	床直	内外面磨耗著しい
11	甕	(22.0)	6.7		AB'C	C	にぶい黄橙	20	床直	
12	甕	(11.2)	7.6		AB'G	B	褐	30	貯穴周辺	
13	甕		5.4	4.6	AB'	B	にぶい黄橙	60	覆土	内外面磨耗
14	甕		10.0	4.4	AB'C	B	暗褐	30	カマド	内外面磨耗

接している。49×56cmの不整方形で、深さは12cmである。壁溝は各壁で部分的に検出され、幅6～17cm、深さ4～7cmである。ピットは検出されなかった。掘り形は床面全体を4cm程掘り下げられており、床下土坑が5基検出された。

遺物は多量に出土しているが、接合率は悪い。カマドから貯蔵穴周辺と住居西半に多く出土している。須恵器には蓋、坏、甕が、土師器には坏、甕、台付甕が認められる。貝巣穴痕泥岩が13点出土している。

第32号住居跡（第75図）

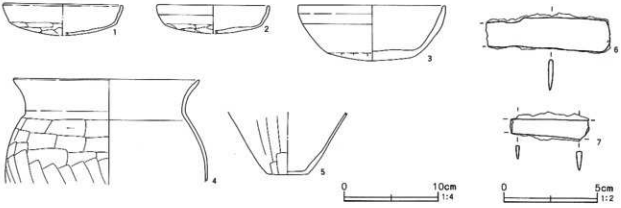
S－35グリッドを中心に位置する。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸3.34m、短軸2.94m、深さは0.07～0.14mである。主軸方位はS－75°－Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、中央付近がやや高くなる。明瞭な硬化面が確認され、特にカマド周辺は顕著であった。壁は開き気味に立ち上がる。覆土は2層に大別されるが、最上層（1層）は近世以降の耕作土と考えられる。

カマドは東壁の南東コーナー近くに設置される。床面から7cm程掘り込まれ、最下層には灰層が厚く残存していた。袖はローム主体で構築されていた。貯蔵穴はカマド右の南壁際に位置し、25×34cmの楕円形で、深さは10cmである。壁溝は東壁以外で断続的に検出され、幅15～23cm、深さ5～7cmである。ピットは検出されなかった。床下土坑が3基検出された。

遺物は少量で、須恵器は出土しなかった。カマドからの出土が目立ち、中央で土師器甕が倒位で出土している。土師器は、大半が甕片であり、接合率は悪い。坏は図示した以外に見られず、接合率は良い。鉄製品が2点出土しており、1点は刀子、1点は刃が付いているが器種は不明である。貝巣穴痕泥岩が1点出土している。

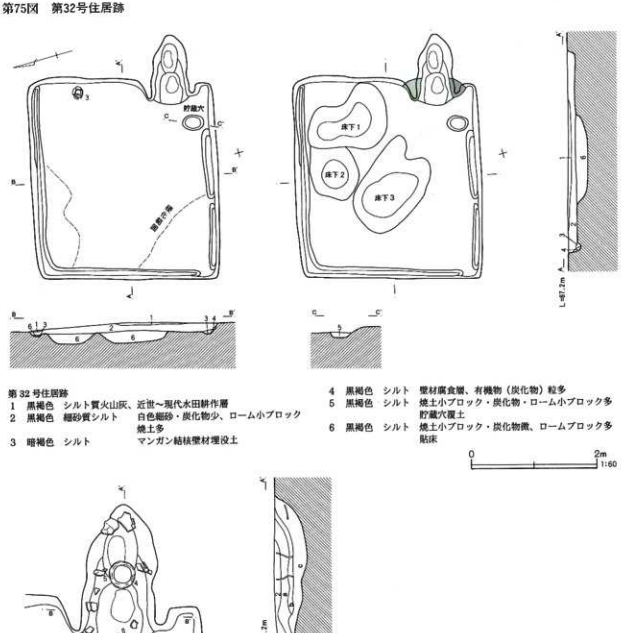
第74図　第32号住居跡出土遺物



第32号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.6)	3.3	(11.4)	AB'	C	にぶい褐	20	床下	内外面やや磨耗
2	坏	(11.8)	3.0	(10.4)	AB'G	C	明褐	25	床下	
3	椀	15.5	5.9	9.3	ABC	C	橙	95	No11	内外面磨耗著しく調整不明瞭
4	甕	19.6	(11.1)		ABC	B	赤褐	75	カマド	
5	甕		6.6	(4.4)	ABCD	C	にぶい橙	15	カマド	内外面磨耗著しい
6	鉄製品	現長6.6cm、刃幅最大1.7cm、背幅0.2cm、重さ11.85g　カマド　刃物の一種								
7	刀子	現長4.2cm、刃幅最大1.0cm、背幅0.3cm、重さ5.09g　覆土　刃部破片								

第75図　第32号住居跡



第32号住居跡
1　黒褐色　シルト質火山灰、近世～現代水田耕作層
2　黒褐色　細砂質シルト　白色細砂・炭化物少、ローム小ブロック
焼土多
3　暗褐色　シルト　マンガン結核壁材理没土
4　黒褐色　シルト　壁材腐食層、有機物（炭化物）粒多
5　黒褐色　シルト　焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック多
6　黒褐色　シルト　焼土小ブロック・炭化物微、ローム小ブロック多
貼床

第33号住居跡（第76図）

S－34グリッドに位置する。カマド左側を浅い撹乱によって壊されている。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸3.00m、短軸2.57m、深さは0.06～0.13mである。主軸方位はS－73°－Eを指す。

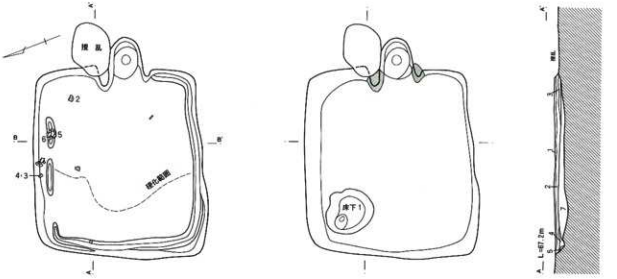
床面は緩やかな起伏があり、南に向って深度が浅くなる。東半部に明瞭な硬化面が確認された。壁は開きながら立ち上がる。覆土は大きく2層に分けられるが、最上層（1層）は近世以降の耕作土と思われる。

カマドは東壁のほぼ中央に設置される。床面から

13cm程掘り込まれ、段を持って立ち上がる。最下層には明瞭な灰層が残存していた。袖はロームとシルトによって構築されている。貯蔵穴、ピットは検出されなかった。壁溝はカマド右から北壁にかけて検出されたが、北壁では断続的で、壁から離れて検出された。幅13～20cm、深さ4～6cmである。掘り形は床面全体を掘り下げられており、床下土坑が1基検出された。

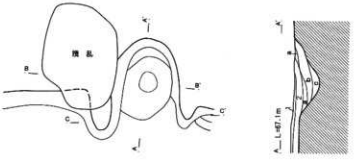
出土遺物は少量で、接合率は良くない。須恵器は図示した蓋、長頸壺以外には坏小片が4片見られる程度である。土師器は坏、甕が認められるが、甕は絶対量不足である。

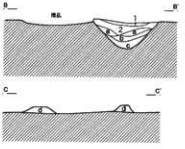
第76図　第33号住居跡



第33号住居跡
1　黒褐色　シルト質火山灰　近世～現代水田耕作土
2　暗褐色　細砂質シルト　焼土小ブロック・炭化物少
3　黒褐色　シルト　ロームブロック・焼土・炭化物多
4　暗褐色　シルト　ローム粒主体の壁崩落土と壁材埋設土
5　黒褐色　シルト　壁材腐食層
6　暗褐色　シルト　ローム粒主体、ローム小ブロック少、貼壁か
7　暗褐色　細砂質シルト　ロームブロックとシルトブロックの層
焼土・炭化粒少・貼床

0　2m　1:60

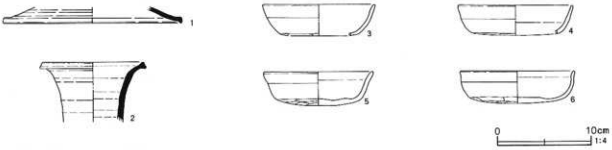




第33号住居跡カマド
a　黒褐色　シルト　焼土小ブロック・ローム粒多、天井崩落土
b　黒褐色　シルト　ロームブロック・焼土・炭化物多
c　黒褐色　灰層　シルト　炭化物ブロック・焼土多
d　暗褐色　細砂質シルト　ロームブロックとシルトブロックの層
焼土・炭化粒少、

0　1m　1:30

第77図　第33号住居跡出土遺物



第33号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋	(18.9)	1.7		ABF	B	灰	10	覆土	末野産
2	長頸瓶	(10.6)	6.3		AB	A	灰	25	床直	産地不明　自然釉
3	坏	(11.7)	3.3	(8.4)	AB'C	B	赤褐	30	北壁際	
4	坏	(11.9)	3.0	(9.1)	AB'G	B	赤褐	15	北壁際	
5	坏	11.5	3.5	9.0	AB'	C	褐	80	北壁際	
6	坏	12.0	3.4	10.1	ABCG	C	明赤褐	55	北壁際	

第34号住居跡（第79図）

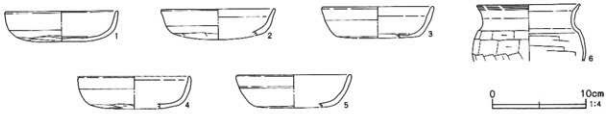
R－34グリッドを中心に位置する。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸2.70m、短軸2.25m、深さは0.10～0.15mである。主軸方位はS－76°－Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、硬化面が明瞭に検出された。壁は開きながら立ち上がる。覆土は大きく2層に分かれるが、最上層（1層）は近世以降の耕作土と思われ、下層は、埋め戻された可能性も考えられる。

カマドは東壁のほぼ中央に設置され、床面を僅かに掘り込む程度で、緩やかに立ち上がる。覆土中に焼土層、灰層は検出されなかったが、煙道部先端は硬化していた。カマドの底面、左右の壁面には焼土化した部分が検出された。貯蔵穴、ピット、壁溝は検出されなかった。掘り形は床面全体を掘り下げられ、床下土坑が2基検出された。

出土遺物は少量で、接合率は悪い。須恵器は、壺かと思われる底部の小片が1片見られるだけである。土師器は、坏、甕が認められる。

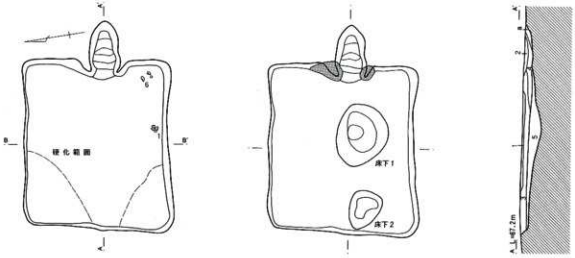
第78図　第34号住居跡出土遺物

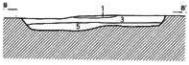


第34号住居跡出土遺物観察表

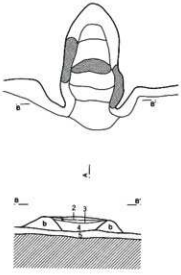
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.0)	3.2	(9.6)	AB'G	C	橙	25	南壁際	
2	坏	(12.0)	3.8	(9.9)	AB'G	C	明赤褐	20	覆土	内外面やや磨耗
3	坏	(11.6)	(3.3)	(8.3)	AB'C	A	明赤褐	20	覆土	
4	坏	(11.7)	3.3	(9.5)	ABG	A	にぶい褐	20	覆土	
5	坏	(12.0)	3.4	(8.0)	ACG	B	褐	20	掘り形	
6	甕	(10.8)	6.0		AB'	B	にぶい赤褐	20	床直	

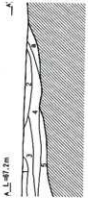
第79図　第34号住居跡





第34号住居跡
1　黒褐色　シルト質火山灰　近世～現代水田耕作土
2　黒褐色　細砂質シルト　焼土ブロック・ローム粒多
3　暗褐色　細砂質シルト　焼土・炭化物少、ローム小ブロック多
4　黒褐色　細砂質シルト　焼土ブロック・ローム粒多、炭化物少
5　暗褐色　シルト　ローム小ブロック多、焼土小ブロック少、細砂微　貼床





第34号住居跡カマド
a　暗褐色　　被熱のため硬化
b　にぶい黄褐色　袖　シルト　ローム小ブロック・炭化物少、ローム粒多

第35号住居跡（第80図）

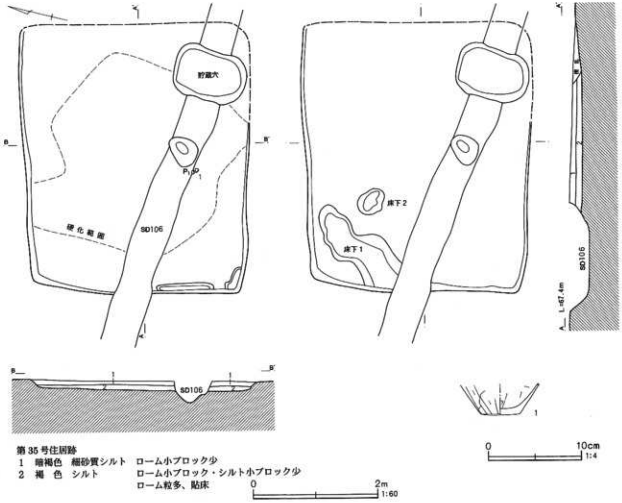
R－32グリッドを中心に位置する。東西に第106号溝跡に切られ、東壁は現代の耕作によって削られている。平面形態は東西に長い長方形と考えられ、東西の残長4.25m、南北3.50m、深さは0.08～0.10mである。主軸方位はN－75°－Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、中央付近では明瞭な硬化面が確認された。壁は開きながら立ち上がる。覆土は1層で、詳細は不明とせざるを得ないが、埋め戻された可能性も考えられる。

カマドは検出されなかった。耕作によって削られた東壁に設置されていたと考えられる。貯蔵穴は南東コーナーと考えられる近くに位置し、一部を第106号溝跡によって壊されている。116×78cmの長方形で、床面からの深さは36cmである。壁溝は南東コーナーと西壁で検出され、幅15～21cm、深さ約4cmである。ピットは第106号溝跡底部で1本検出され、覆土の観察から本住居跡に伴うと判断した。深さは住居床面から25cmである。掘り形は床面全体を掘り下げられ、床下土坑が2基検出された。

出土遺物は2片のみで、図示した土師器甕底部以外は、甕胴部小片である。

第80図　第35号住居跡・出土遺物



第35号住居跡
1　暗褐色　細砂質シルト　ローム小ブロック少
2　褐　色　シルト　ローム小ブロック・シルト小ブロック少
ローム粒多、貼床

第35号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕		3.3	4.1	ABCG	B	にぶい橙	40	床直	

第36号住居跡（第81図）

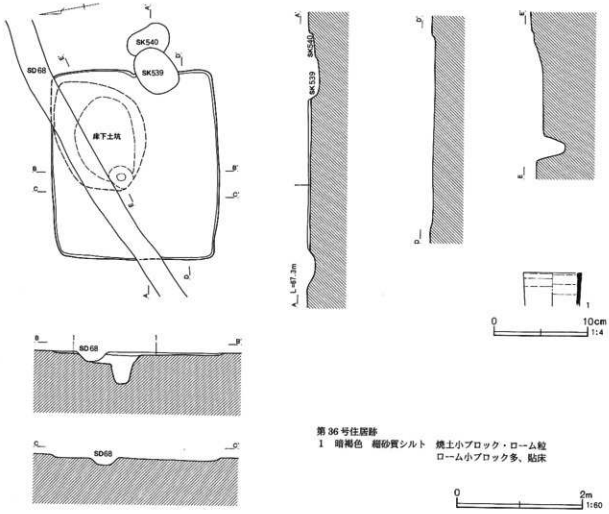
Q－33グリッドを中心に位置する。第539・540号土坑、第68号溝跡に切られ、上層は耕作によって攪乱されていた。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸3.00m、短軸2.53m、深さは0.03～0.05mである。主軸方位はS－80°－Eを指す。

貼床部を検出したのみで、床面、壁、覆土の状態は不明とせざるを得ない。

カマドは検出されなかったが、第539号土坑に壊された付近に設置されていたと考えられる。貯蔵穴は、壁溝、ピットは検出されなかった。掘り形は床面全体を掘り下げており、床下土坑が1基検出された。

出土遺物は極めて少量で、須恵器は図示したコップ形須恵器1点のみである。土師器は坏、甕が30片認められるが、何れも小片である。貝巣穴痕泥岩が3点出土している。

第81図　第36号住居跡・出土遺物



第36号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	コップ形	(6.2)	3.5		ADG	B	灰	10	覆土	南比企産

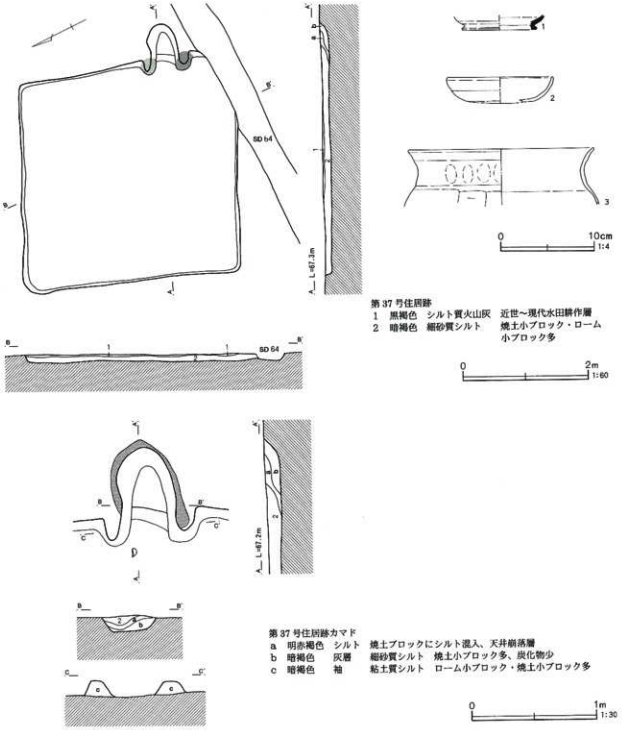
第37号住居跡（第82図）

Q－33グリッドに位置する。南東コーナーを第64号溝跡に切られる。第38・39・40号住居跡と重複し、何れよりも新しい。平面形態は方形で、規模は長軸3.50m、短軸3.30m、深さは0.10～0.14mである。主軸方位はS－66°－Eを指す。

床面は緩やかな起伏が見られるがほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は2層に分けられるが、上層（1層）は近世以降の耕作土と考えられる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。床面からの掘り込みは見られないが、覆土下層には灰層が明瞭に残存していた。煙道部周辺は焼土が見られ、袖は

第82図　第37号住居跡・出土遺物



粘土質のシルトとロームを主体に構築されていた。貯蔵穴、壁溝、ピットは確認されなかった。

出土遺物は少量で、接合率は極めて悪い。須恵器は図示した高台付坏1点である。土師器は坏、甕が認められるが、絶対量不足である。貝巣穴痕泥岩が6点出土している。

第37号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	高台坏		1.6	(7.8)	AB'G	C	明褐	10	覆土	産地不明 土師質 内外面磨耗著しい
2	坏	(11.0)	3.7	(7.3)	AB'G	B	明褐	10	カマド	内外面やや磨耗
3	甕	(19.6)	6.0		AB'G	B	赤褐	10	床下	

第38号住居跡（第38図）

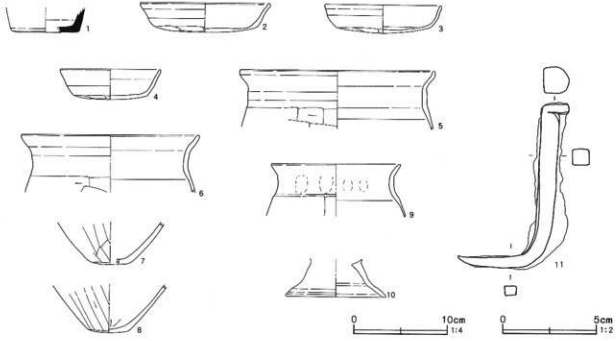
Q－33グリッドを中心に位置する。第39・40号住居跡を切り、第37号住居跡に切られる。北西コーナー部分は第541号土坑に壊される。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸3.71m、短軸3.12m、深さは0.21～0.32mである。主軸方位はS－78°－Eを指す。

床面はやや起伏が見られ、南側と東側が低くなる傾向がある。明瞭な硬化面が確認された。壁は開き気味に立ち上がる。覆土は8層に分けられるが、南側の堆積が不自然で、一部埋め戻された可能性もある。

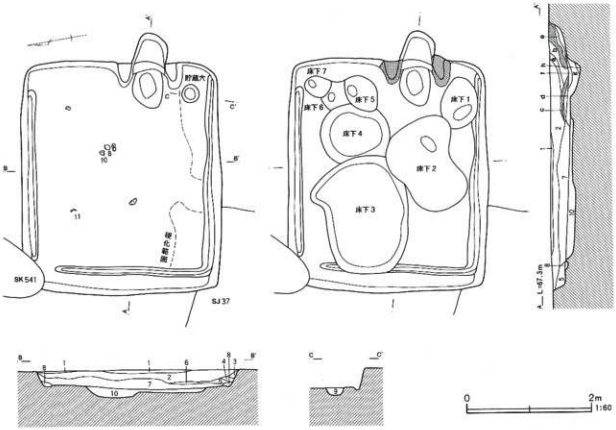
カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部は床面を15cm程掘り込み、急激に立ち上がって煙道部へ続く。覆土に明瞭な焼土層が残存し、下層には灰層が見られた。袖は、ロームブロックを含むシルト主体で構築されていた。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、直径28cmの円形で、深さは13cmである。壁溝は東壁以外で検出され、西壁では壁から離れて検出されている。幅11～29cm、深さ3～7cmである。ピットは検出されなかった。掘り形は床面の一部を掘り下げており、床下土坑が7基検出された。

出土遺物の量は多いが、接合率は悪い。須恵器は図示したコップ形須恵器以外では坏、甕が認められるが何れも小片である。土師器は、坏、甕、台付甕等が見らる。他には鉄製の釘と、貝巣穴痕泥岩が17点出土している。

第83図　第38号住居跡出土遺物



第84図　第38号住居跡

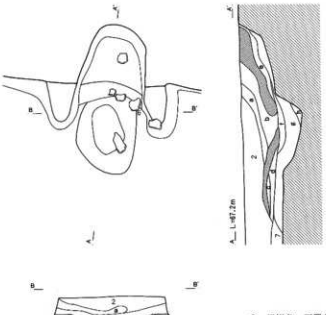


第 38 号住居跡

1	暗褐色	シルト質火山灰	現代水田耕作層
2	暗褐色	細砂質シルト	ローム小ブロック・炭化物少、焼土・小ブロック多
3	褐　色	粘土質シルト	ロームブロック主体の壁崩落土
4	暗褐色	シルト	シルトブロック主体の壁貼付材
5	暗褐色	シルト	シルトブロックとローム小ブロック主体の貼壁崩落層
6	明赤褐色	粘土質シルト	焼土ブロック主体、炭化物少
7	にぶい黄褐色		焼土ブロック
8	黒褐色	シルト	有機質の覆材腐食層
9	褐　色	粘土質シルト	焼土・炭化物少、ローム粒多
10	黒褐色	粘土質シルト	貯蔵穴覆土 焼土少、ロームブロック多 貼床

第 38 号住居跡カマド

a	暗褐色	細砂質シルト	ローム小ブロック・ローム粒・焼土多 焼土小ブロック・炭化物少
b	暗褐色	細砂質シルト	ローム小ブロック・焼土小ブロック ローム粒・焼土少、崩落後流入土
c	暗褐色	細砂質シルト	焼土小ブロック・焼土多
d	褐　色	細砂質シルト	ローム小ブロック・炭化物少 焼土小ブロック主体 ローム粒・焼土多
e	黒褐色	細砂質シルト	ローム小ブロック少 焼土小ブロック極多 焼土・炭化物多 煙道流入土と天井落盤層
f	黒褐色	灰層2	有機質シルト　焼土小ブロック少、焼土多、炭化物主体
g	暗褐色	細砂質シルト	ローム小ブロック少、焼土小ブロック多
h	黒褐色	灰層1	有機質シルト　ローム小ブロック少、焼土小ブロック多
i	黒褐色	袖	粘土質シルト　シルトブロック主体、ローム小ブロック多



第38号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	コップ形		2.6	(7.0)	AG	A	灰	15	覆土	産地不明
2	坏	(13.6)	3.1	(10.8)	AB'G	B	にぶい褐	35	覆土	内外面磨耗
3	坏	(12.1)	3.0	(9.8)	AB'G	B	橙	40	覆土	内外面磨耗
4	坏	(10.6)	3.2	(7.8)	AB'G	A	橙	25	覆土	
5	甕	(20.5)	6.2		AB'G	B	赤褐	20	掘り形	
6	甕	(18.8)	6.1		AB'CG	A	赤褐	20	カマド	
7	甕		(4.6)	(4.0)	AB'G	B	明赤褐	20	覆土	
8	甕		(5.2)	(4.4)	AB'CG	C	明褐	40	床直	
9	甕	(13.6)	5.6		AB'G	B	明褐	20	掘り形	内外面磨耗
10	台付甕		4.0	(10.5)	AFG	A	明褐	25	床直	
11	釘	頭1.4×1.3cm、全長8.7cm、断面幅0.9×0.9cm、重さ36.4g 床直								

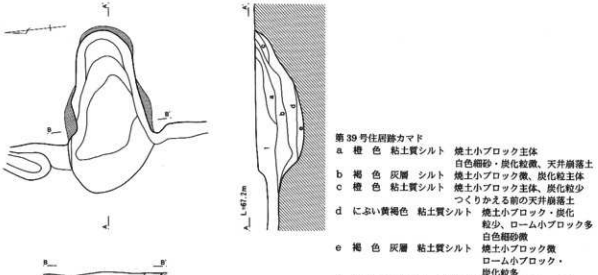
第39号住居跡（第85・86図）

Q－33グリッドに位置する。第37・38号住居跡に切られ、第40号住居跡を切る。第37号住居跡より深いため、この部分の床面の検出は可能であった。平面形態は、東西に長い長方形で、規模は長軸4.20m、短軸3.35m、深さは0.16～0.20mである。主軸方位はS－86°－Eを指す。

床面は僅かに起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は上層を第37号住居跡で壊されるため詳細は不明だが、埋め戻された可能性がある。

カマドは、東壁中央より僅かに南に設置される。床面を15cm程掘り込み、緩やかな段を持って立ち上がる。側壁と奥壁に焼土が見られた。覆土下層と中層に灰層が残存していた。袖は小さく、ロームとシルト主体で構築されていた。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、壁に接している。44×46cmの不整方形で、深さは6cmである。壁溝はほぼ全周するようで、幅16～25cm、深さ約6cmである。ピットは検出されなかった。掘り形は床面の一部を掘り下げられ、床下土坑が4基検出された。

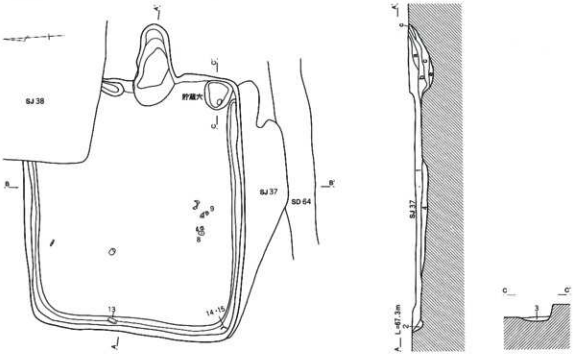
第85図　第39号住居跡(1)

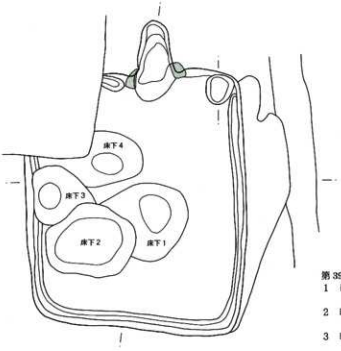


第39号住居跡カマド
a　橙　色　粘土質シルト　焼土小ブロック主体
白色細砂・炭化粒微、天井崩落土
b　褐　色　灰層　シルト　焼土小ブロック微、炭化粒主体
c　橙　色　粘土質シルト　焼土小ブロック主体、炭化粒少
つくりかえる前の天井崩落土
d　にぶい黄褐色　粘土質シルト　焼土小ブロック・炭化
粒少、ローム小ブロック多
白色細砂微
e　褐　色　灰層　粘土質シルト　焼土小ブロック微
ローム小ブロック・
炭化粒多
f　にぶい黄褐色　褐　シルト質粘土　焼土小ブロック微
ローム小ブロック多

0　1m
1:30

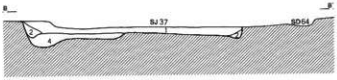
第86図　第39号住居跡(2)





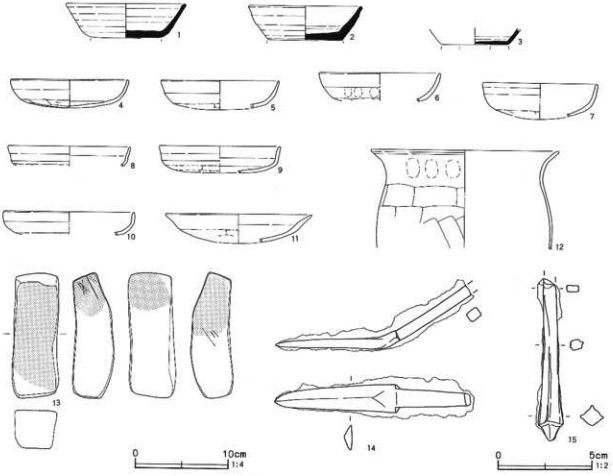
第39号住居跡

1	にぶい黄褐色	細砂質シルト　焼土小ブロック・白色細砂多 ローム小ブロック少、炭化物微
2	暗褐色　シルト	焼土小ブロック・炭化粒微 ローム小ブロック多、白色細砂少
3	暗褐色　シルト	焼土小ブロック微、ローム小ブロック 炭化粒多、貯蔵穴覆土
4	褐色　粘土質シルト	焼土小ブロック・ローム小ブロック多 炭化粒微少、貼床



出土遺物はやや多く見られるが、接合率は悪く、図示したもの以外はほとんど接合しない。須恵器は坏と、壺かと思われる底部が認められる。土師器には、坏、甕が認められる。他には、鉄製のやりがんな、棒状製品、砥石が出土している。また、貝果穴瑱泥岩が3点出土している。

第87図　第39号住居跡出土遺物



第39号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.6)	3.6	(7.5)	ABFG	C	灰	45	覆土	末野産　内外面摩耗
2	坏	(11.9)	3.7	(7.9)	AD	B	灰	45	覆土	南比企産
3	坏		1.8	(7.0)	AB'FG	B	灰	25	覆土	末野産　内外面磨耗
4	坏	(12.3)	3.0	(10.4)	AB'G	B	によい赤褐	75	覆土	
5	坏	(12.4)	2.9	(9.8)	AB'C	A	橙	15	覆土	内外面磨耗
6	坏	(12.8)	3.0	(10.1)	AB'	A	橙	20	覆土	内外面やや磨耗
7	坏	(12.0)	3.5	(9.5)	AB'G	B	橙	20	覆土	内外面磨耗著しい
8	坏	(12.8)	2.1		AB'F	A	明褐	30	床直	内外面磨耗著しい
9	坏	(12.8)	2.8	(11.6)	AB'F	A	明褐	30	床直	内外面磨耗著しく調整不明瞭
10	坏	(13.8)	2.4	(11.5)	AB'G	B	明褐	20	床下	
11	皿	(15.9)	3.0	(12.7)	AB'	B	明褐	20	覆土	内外面磨耗著しい
12	甕	(19.8)	6.4		AB'C	B	によい褐	15	覆土	
13	砥石	長さ13.2cm、幅4.2cm、厚さ4.1cm、重さ440.8g　西壁際　凝灰岩　刃傷あり								
14	鉄製品	現長10.4cm、刃幅最大1.4cm、厚さ0.4cm、重さ31.86g　西壁際　刃部～柄部破片								
15	鉄製品	現長8.6cm、上端断面幅0.6×0.4cm、重さ11.14g　西壁際　棒状の破片								

第40号住居跡（第88図）

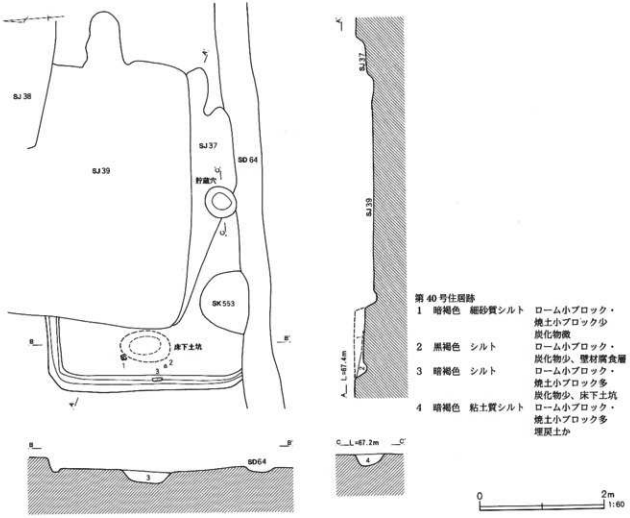
Q－33グリッドを中心に位置する。第37・38・39号住居跡、第64号溝跡、第553号土坑と重複し、何れのものもより旧いため、遺存状態は悪い。平面形態は東西に長い長方形になると思われる。南北の残長が3.14m、深さは0.15～0.18mである。北壁の方位はN－90°－Eである。

床面は緩やかな起伏があるようで、残存する西壁は開き気味に立ち上がる。覆土の詳細は不明とせざるを得ないが、西壁近くで確認された覆土からは、埋め戻された可能性がある。

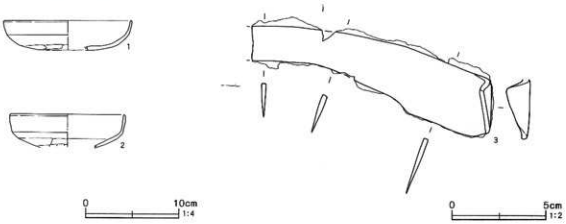
カマドは検出されなかった。他の住居跡と同様に東壁に設置されていたと考えられる。第37号住居跡との境に、落ち込みが確認された。直径約50cmで、深さは19cmである。位置的に本住居跡の南東コーナー近くと考え、他の住居跡同様、貯蔵穴とした。壁溝は確認された西壁、北壁で検出され、幅15～25cm、深さ約8cmである。ピットは検出されなかった。西壁近くで床下土坑が1基検出された。

出土遺物は極めて少なく、図示したもの以外は接合しない。須恵器は坏と思われる小片が1片のみである。土師器は、坏、甕が認められるが、絶対量不足である。鉄製の鎌が1点出土している。

第88図　第40号住居跡



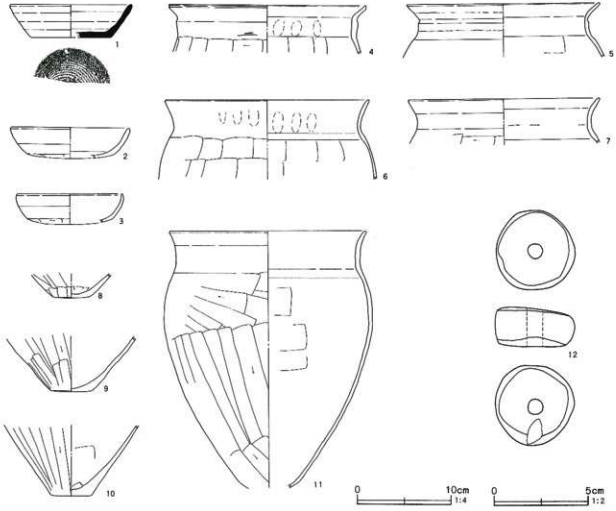
第89図　第40号住居跡出土遺物



第40号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(13.5)	3.1	(10.5)	AB'G	A	赤褐	20	床直	内外面磨耗著しい
2	坏	(12.0)	3.5	(10.5)	AB'G	A	明赤褐	20	床直	
3	鎌	現長12.8cm、刃最大幅3.2cm、背幅0.2～0.3cm、重さ64.62g　西壁際　切先欠								

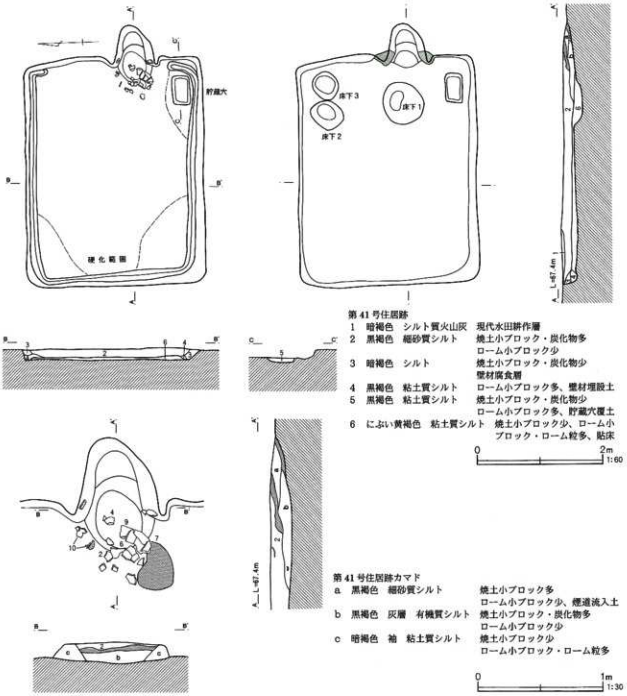
第90図　第41号住居跡出土遺物



第41号住居跡（第91図）

Q－32グリッドに位置する。第43・45号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸3.60m、短軸2.70m、深さは0.11～0.16mである。主軸方位はS－88°－Eを指す。

床面はやや起伏があり、明瞭な硬化面が確認された。壁は開きながら立ち上がる。覆土は、概ね1層で、埋め戻された可能性がある。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部の掘り込みは僅かで、緩やかに立ち上がる。覆土に焼土層が残存し、最下層には厚い灰層が確認された。袖はローム主体で構築されていた。貯蔵穴は南東コーナー近くに位置し、28×46cmの長方形で、深さは8cmである。壁溝はカマド左側以外で全周し、幅18～28cm、

第91図　第41号住居跡